

# 妖精王の編纂

zumuzumu

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「妖精女王」がいるなら、「妖精王」もいて良くね？

目

次

序  
章

1  
話

2  
話

3  
話

樂園の塔編

4  
話

5  
話

6  
話

7  
話

8  
話

幕間の物語  
I

77 62 50 41 31 23 15 7 1

# 序章

## 1話

イシュガル大陸フイオーレ地方マグノリア。

ここはアースランドと呼ばれる世界。

人々の生活は魔法とともににある。

魔法を使い、魔法で職をなし、魔法と暮らす。

ファンタジー溢れるこの世界では「ギルド」と呼ばれるものがある。

魔法を使う魔導士たちが形成した集団のことだ。

そこに持ち込まれる依頼を魔法で解決することで得た報酬で経営する組織のことを「ギルド」と呼称する。

数多くのギルドが存在するこの世界の中で、現在ここマグノリアでは2つのギルドが互いを睨み合っている。

妖精の尻尾フェアリー・テイルと幽鬼の支配者ファンントムロードだ。

互いが大陸を代表する人気ギルド。

最近では幽鬼の支配者たちに妖精の尻尾がギルドを破壊され、メンバーが急襲されるという事件が相次いでいたが、今現在その2ギルド間で抗争が起きていた。

本来ギルド間抗争は評議会によつて禁止されている。

攻撃に転じれば即脅威となり得るのが魔法だ。

集団単位になり、尚且つ戦争ともなればその危険度は推し量るべきだろう。

この世界では魔法を使える魔導士と呼ばれる存在は全人口の1割ほどだ。

残り9割の大多数の人々を魔法から守るためにも評議会はこのようない取り決めを数多く作り、魔法界の秩序を守らんとしている。

破れば厳しい罰則もやむなし。

仲間を傷つけられ怒りに燃える妖精の尻尾と自分たちのプライドのために応戦する幽鬼の支配者。

マカロフを始め、火サラマンダーのナツ、グレイ・フルバスター、妖精女王ティタニア

エルザ・スカーレット、エルフマン、ロキ、ほかにも腕が立つ魔導士が多数存在する妖精の尻尾。

一方ジョゼが率いる幽鬼の支配者ではエレメント4と呼ばれる火、水、土、風の魔導士に鉄の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーである鉄のガジル。

雑誌や新聞などでその名を轟かせる者たちの争い。

その実力は拮抗する——かに思われた。

「……バカな！ 一体何だというのだ貴様は！」

ギルドマスターというのは強者揃いばかりだ。

荒くれ者のギルドメンバーをまとめるためにも強者がマスターになるのは自然の理。

魔力が高いだけでも恐ろしいが、その中でも聖十魔導士と呼ばれる大陸で優れた10人の魔導士たちに贈られるこの称号を持つものはその比ではない。

妖精の尻尾のマスター・マカロフ、そして幽鬼の支配者のマスター・ジョゼ。

先日幽鬼の支配者の支部ギルドに殴り込みをかけた際に不意を突かれ魔力欠乏症になつてしまつたマカロフがいない今、ジョゼを止める者はいないかと思われた。

最強のエレメント4であるアリアを下したエルザに加え元S級魔導士たるミラジエーンにグレイとエルフマンが手も足も出なかつたのだ。

しかしそのジョゼは妖精の尻尾のある1人の魔導士により地に伏せられ追い詰められているという異常事態に直面していた。

「（何故だ！ 何故この私が地を這い蹲つている!?）

「……その質問にはこう簡単に答えられる」

おかしい。

事前に妖精の尻尾には徹底的に探し込みをかけていたはずだ。

そう頭の中で自問自答を繰り返すジョゼ。

ギルダーツは不在。

ラクサス、ミストガンも仕事で遠くにおりこの場にはいない。

エルザはアリアと戦つたことで負傷。

ミラジエーンは引退し戦闘は論外。

他にも戦力と呼ばれる魔導士たちはガジルやエレメント4に任せることでほぼ相殺できたはずだ。

後は自らを虚偽にしてくれた妖精の尻尾のギルドを木端微塵に破壊し、魔導士たちを殲滅する。

更には巨大財閥のハートフイリア家のルーシイ・ハートフイリアを手に入れることで得られるだろう資金を元手に再びマグノリアN.O.1のギルドに帰り咲く手筈だつた。

この国で一番の魔力、一番の人材、一番の資金。自分からそれすべてを奪つたマカロフに絶望を与えるはずだった。

そのはずだつたなのに!!

自らが行使する魔法には絶対の自信を持つていた。

ここまで登り詰めてきたのだ。

それを事も無げに一蹴し、見下すこの男は一体何者だ。

「……アンタが俺より弱いからだよ」

「何だと貴様アアアツ!!」

その何気ない一言。

虫蝻を見るかのような眼に怒りが頂点に達したジョゼは魔力を開放する。

「シェイド幽兵」と呼ばれるその魔力は禍々しさでいえばこの大陸でも5本の指に入るだろう。

伊達に聖十台魔道の称号はないということか。

本来であればそのあまりの禍々しさに相対する魔導士は吐き気を覚え、動けなくなり成す術はない。

だがしかし。

「なつ、また!？」

その魔法はまるで削除されたかのように搔き消えた。

魔法を使つた形跡もなく、まるでなかつたかのようにジョゼが放つた魔法は消えたのだ。

この世界のどこかには魔法を無効化する魔法を使う悪夢のような魔導士がいるらしい。

だがそれにしたつて何かしらのモーションがあるはずだ。この男はその場から動かず、手をポケットに突つこんだまま魔法を消したのだ。

「チックショウガアアアア!!!」

魔法をいくら放てどその度に撃き消える奇怪な現象。

邪悪な魔力で生成された魔法の光線も面で制圧する大規模魔法も関係ない。

全て目の前の憎き魔導士に届く前に消え去るのだ。

今まで自らの魔法と力ですべてを成し遂げてきたジョゼにとつて理解しがたい光景であつた。

気が狂いそうなその現実に何とか目を向け、考えを巡らしても答えは出ない。

何をしているのだ。

魔法を使つた形跡は見られなかつた。

何の素振りも見られなかつた。

「何なのだ！ 一体貴様は何なのだ！ 妖精の尻尾に関する調査は完璧だつたはず！ お前のような魔導士がいるなんて報告になかつたはずだ！」

「うつ……まあ俺はギルダーツのおっさんや他の奴らほどメディアには出ないし、基本クエストであんまりギルドにはいないからなあ。そう思われるのは仕方ないか」

地面を這い蹲り、憔悴しきつた顔で問い合わせてくるジョゼの問いかけに対し、その男は朴訥とした雰囲気を崩さないまま、どこか残念そうな姿で「うーん」といった表情を浮かべながら答える。

自分がこれだけ疲弊しきつているのに対し相手はどこまでも余裕の態様。

その姿だけで自分が舐められていると感じ、頭がはちきれそうになるもう殆ど魔力が残っていない。

一体どうしたものかと策謀を張り巡らせていくところへ一つの足

音。

聞こえてくる方へ眼を見やればそこに居たのは畳にかけたはずのマカロフ。

「ジ、苦労じやつたな、ツバキよ。後はワシに任せい」

「……それは良いけど、体は大丈夫かい、マスター？」

「心配せんでもよいわ。それにうちのガキどもがここまで体を張つてくれたんじや。最後は親としてケジメをつけさせてくれ」

そういうて悠然と歩きだすマカロフ。

ジョゼはツバキと言われた男のことを必死に頭の中で反芻し、そして気づく。

妖精女王オーベロンと対をなす「妖精王」の二つ名の持ち主。

妖精の尻尾最強の魔導士ギルダーツに比肩する力量。

滅多に姿を現さないため、ギルド以外の者からはその詳細を知ることは少ない。

「……そうか、貴様があの」

「妖精の尻尾審判のしきたりにより、貴様に三つ数えるまでの猶予を与える」

——その後辺りをまるで優しい柔らかな光と魔力が包み込み、2ギルド間の戦争は終結した。

術者が敵と認識したものだけを殲滅する伝説の超魔法「妖精三大魔法」の一つである妖精の法律フエアリーコウ。

マカロフのその魔法により今回の事件は幕切れを迎える。

妖精の尻尾はあるべき姿を取り戻すために壊れたギルドの再生——にはならなかつた。

全壊などしていいなのだ、ギルドは。

メンバーも傷ついているものは少ない。

それはこの男の活躍が大きいだろう。

ミストガンとは別に各地の幽鬼の支配者の支部ギルドを潰しこそ早く駆けつけ、魔導収束砲、ジュピターを止めようと金剛の鎧で立ちは

だかつたエルザを庇い、自身の魔法によつて無効化。

またマスター・ジヨゼを瀕死に追いやるまでに健闘した。

マカロフがいなくとも、彼のお陰で妖精の尻尾は持ちこたえることが出来たのだ。

そんな妖精の尻尾もう一人の最強の魔導士、ツバキ・ロードレイは。

「……いや全然泣いてないし。ギルド調査されたのに名前なかつたとか別にどうつてことないし。ツバキさんは基本一人で外にクエストですからね。仕方ないよね」

「まあそう悔やむな。お前のお陰で私たちもギルドも健在なのだ。誇るがよいさ」

「……くすん」

調査したのに自分の名前が何一つ上がつてこなかつたという自身の影の薄さを全力で悩んでいた。

その姿を見て苦笑いしたエルザに胸に頭を抱かれ慰められていた。ジヨゼと相対したときの姿は一体どこに。

これは、妖精王と呼ばれた青年が仲間とともにハッピーエンドを作り上げる物語。

「（あつ、今鎧じやないからちょー柔らかい）」  
おいツバキそこ代われやコラぶち殺すぞ。

## 2話

「ねー、ナツつてばー。聞いてるのー？」

そう問いかけるのはルーシイ・ハートフィリア。

金髪で星靈を行使する星靈魔導士。

ナツとハッピーに連れてこられ妖精の尻尾に入つたばかりの新人。ちなみに巨乳。

先の対幽鬼の支配者戦で人質になつたものの、ナツの打倒ガジルに貢献しマカロフに諭されたことで晴れて「自分は妖精の尻尾の一員である」と誇れた少女。

あの後駆けつけた評議会の面々と1週間に渡る取り調べを受けたメンバーたち。

本来であれば罰則は免れない。

しかしマスター・マカロフの旧友である魔法評議員のヤジマのお陰で無罪となるのは、それからすぐ後のことである。

そんなギルドメンバーたちは現在ギルド再建に勤しんでいる。全壊は免れたものの所々壊れていたところを直しているのだ。

またそれだけではなく、幽鬼の支配者の移動型ギルドによつて壊された街中も補修しているところである。

地域密着型でイベントを企画することもある妖精の尻尾のメンバーは、今回の事件で壊れてしまつたマグノリアの街に対して無償で修理を請け負つていた。

こちらの問題に巻き込んでしまつたのだ。

提供された土地を借り受けてギルドを経営している以上、筋を通すのは当然のことであつた。

そして補修作業もある程度片付き、一同で休憩をとつていた時のこと。

「何だルーシイ？便秘か？」

「違うつづーの！っていうかセクハラよ！そうじやなくて、ツバキさんのこと！」

怒りながらもルーシイは右手で指示した方へとナツの意識を向ける。

そこに居たのはツバキ・ロードレイ。

霞んで外にはねた白髪、髪と同じ色のロンTの上から羽織るパープルベストに黒のスキニー。

お前ファンタジー世界に迷い込んだ大学生かよ、という格好だ。

周りのメンバーと協力することなく黙々と作業を続けていた彼も一区切りついたのか、一人建築木材の上で腰を落ち着かせていた。

今回の一件で間違いなく大活躍した人物。

ルーシイは知らなかつたが、妖精の尻尾の最強の魔導士の一人であり「妖精王」オーベロンの異名を付けられている彼。

聞けばあの恐ろしいマスター・ジョゼを赤子の手を捻るかのように叩きのめしたこと。

魔法を使つた様子もなく、ただただ一方的に圧倒したと聞いて信じられなかつた。

というか今も半信半疑である。

でもそんなに強い人物だつたとなんて…、と思つたルーシイはその後お礼を言おうと事件以来ツバキとの接触を図つていたのだ。

しかし近づこうとすれば距離を広げられ、静かに近づこうとすればいつの間にか姿を消し、大声で名前を呼びながら近づこうとしても避けられる。

接点を持つたことがなく、ただ聖十大魔導の一人を圧倒できる実力の持ち主ということで半ば戦々恐々としていたルーシイ。

しかし蓋を開けてみればご覧のあり様。

私何かしたのかしら?と思ひ、やはり今回の一件は迷惑だつたのかと気が滅入りそうになつていていたのだ。

そこで同じチームのナツたちにどういう人物か聞いてみることにしたというわけだ。

「ツバキってあんまり人と一緒にいないよね。オイラはたまに話すけど

「だな。他のギルドの皆よりかは少し雰囲気が違うつづーか、一線を

引いてるつづーか

「でもすげー強いもんな。いつか勝負してもらえねーかな！」

ナツだけでなく彼の相棒のハッピー。

たまたま近くにいたグレイも答えてくれた。

グレイが答えたとき一瞬後ろの方から寒気を感じた。

ここ一週間グレイといふだけ感じるものだが、ひとまず気にしないことにするルーシイ。

この時点ではナツから話を聞くことを諦めたルーシイは目線をハッピーに向ける。

「え、ハッピーは話すの？」

「あい！ ツバキって、人とはあまり話さないけどオイラとか動物には優しくしてくれるんだよ。この間大トロくれたんだ」

ハッピーが涎をダラダラと垂らしながら恍惚の表情を浮かべて「幸せそうね……」と答えるルーシイ。

動物ねー、二コラを抱えたまま近づけばもしかしたら逃げないでくれるかもと考える。

「クエストも基本一人で行くしな。うちのバカ騒ぎにも基本顔は出さねーし。ギルドでも素性を詳しく知っている奴は一人を除いてあまりいねーな」

グレイが付け加える。

まとめるところだ。

- ①滅茶苦茶強い（聖十大魔導に名を連ねる魔導士を圧倒する力量）
- ②何を考えているか不明（近づこうにも避けられる）
- ③動物には優しい（大トロ私も食べたい）

結論＝OK, He is the ユニコーン！

彼も他の妖精の尻尾の魔導士の例に漏れず問題児！？

とガクンと項垂れるルーシイであつたが

「ん、ちょっと待つて。今『一人を除いて』って言つた？」

「ああ。お、ちょうど良い。あれ見てみろ」

グレイの物言いに引っかかったルーシイがグレイを見やると彼は

ニヤリと笑いツバキがいる方へ顎で示した。

その方を見るとボーッと空を見上げながら休憩しているツバキのほうへ歩むエルザの姿。

妖精の尻尾に入る前から憧れていた最強の女魔導士。

いつも凜としていてギルドの風紀委員長の一面を併せ持つ彼女。

「ゞ）苦労様だな、ツバキ。隣空いてるか？」

「……んあ、エルザ？どうぞー」

「そ、そうか。……では失礼する」

そろりと近づき声をかけたエルザはそわそわと落ち着かない印象を覚える。

彼に許可をとり隣に座るもののは、よりその雰囲気は強まつた。目を凝らしてみれば少し顔が赤く緊張しているようだ。

そして彼女の手元には彼女の掌から少しはみ出るほどの大さきの直方体の物体がある。

それは可愛らしい熊の絵柄がプリントされた風呂敷で包まれていた。

そう、お弁当である。

「その、お弁当を作つたのだ……。お前はいつもその……ご飯は外で済ましているだろ？！それだと栄養が偏つていけないと思つてだな。今回はとても助けられたらし、お礼もかねてお弁当を作つてきたのだ…。だから、そのう……食べてくれないか？」

「（え何あれ本当にエルザ！？ていうか可愛いんですけど！）」

顔を赤らめ下向きもじもじしているエルザ。

意を決したものの顔を見ながら渡すことはできなかつたようで、背けながら弁当を差し出す。

いつもの「騎士」然とした雰囲気は影もなく、そこに居るのは19歳の普通の女の子であつた。

普段とのあまりのギャップに一人悶えるルーシイ。

「（ちよつと何よあれ！まさかエルザつてもしかして……！）」

「何で声潜めてんだよ……。まあ見ての通りだよ。ツバキに惚れても

のさ。公然の秘密だけどな」

このギルドに入つてから初めて感じる「恋の予感」に一人テンションが上がるルーシイ。

普段飲んで食つて騒いで殴つて壊して直してまた壊して、がデフォなこの妖精の尻尾において、そんなピュアもピュアなものを味わえるとは思つていなかつたのだ。

しかもその当事者があのエルザだというのだ。

これでテンションが上がらずにいられるわけないっての！

トルーシイは先ほどまで感じていたツバキへの不信感などはきれいさっぱりとほっぽり捨てた。

そんなことよりも現在目の前に起きている状況を見納めようと、ノリノリでグレイから話を伺う。

「キャーもう何よ！そんな楽しい話がこのギルドにもあつたのね！ねえねえもつとあの2人のこと聞かせなさいよ！」

「ルーシイ急にテンションが変わつたね。オイラドン引きだよ」

何やら隣で青猫が失礼なことを言つているが無視無視。

バンバンとグレイの背中を叩きながら続きを促す。

が、寒氣が最高潮に達し殺氣も感じたのですぐに手を收めることにした。

「別に全部知つてるわけじゃないぜ？ただいつも俺らに隙を見せないエルザだけど、あいつの前だとあんな感じなんだよな」

「あたしは昔からあの2人を見てたけど、話すとちよいと長いんだよねえ。まあ、まとめると天然ジゴロなツバキが無自覚にエルザの心の壁を壊して落としたのさ」

いつの時代もどこの世界も恋バナというのは女子の間で盛り上がる一つのアイテムなのだろう。

カナが話に入り込んできた。

ある日突然妖精の尻尾にボロボロの状態でやつてきたエルザ。

誰とも馴れ合はず、一人で過ごしていた彼女はある日を境にツバキに接するようになつたのだ。

それを皮切りに次第にメンバーとも話すようになり笑顔も増えて

きたという。

彼女が変わつていつてもツバキのスタイルは昔から変わつていな  
いようだが。

これ以上はエルザが可哀想だから本人から聞きなよ、とそこでカナ  
は話し終えた。

へえ、と嘆息するルーシイ。

いつもは持ち前の魔法で敵を一層する彼女。

エリゴールとの一戦や幽鬼の支配者戦でも幾度もその雄姿を目に  
したことだろうか。

常にギルドや仲間のことも考え自分が犠牲になり血を流すことを  
一切厭わない。

風紀委員長の一面も持つ厳しくも優しい心を持つた彼女が、ただ1  
人ツバキの前では無防備な姿でいるのだ。

その姿を見られるのがギルドの皆は嬉しいのだという。

彼の前では一生懸命オシャレをし、振り向かせるために努力する恋  
に取り組む女の子なのだ。

普段は滅私奉公を地で行く彼女がその時見せる笑顔を見守るため  
に、ギルドメンバーは敢えて弄ることはせず公然の秘密としている。  
また一つ妖精の尻尾の良い一面を垣間見たルーシイはエルザたち  
の方を見やる。

その視線は好奇が入り混じつたものではなく慈愛に溢れていた。

「お、マジかくれるの？じゃ遠慮なく」

「あっ、え本当か！？って、その前に手を拭かんか！ほらお絞りだ」

「おおうスマン。ありがとう」

もしかしたら食べててくれないので不安になつていていたエルザだ  
が、ツバキが貰おうとすると曇つっていた表情はどこへやら。

パアツと輝き始めたも束の間、作業で汚れた手のまま食べようとし  
ていたのでお絞りを手渡す彼女。

こういうときでも持ち前の風紀委員精神は出てきてしまうようだ。

中には白飯に梅干しが中心に据えられた一段目。

二段目にはミートボールやポテトサラダ。

プチトマトにひじき煮、そして何歳になつて食べても美味しい嬉しい鶏の唐揚げ。

他にも所狭しと並べられたおかずが入つている。

「美味しい」と普段は死んでいる目を輝かせるツバキ。

それを見てまるで花が咲き誇るかのような満面の笑みを浮かべるエルザ。

夢中で食べ進めあつという間に完食するツバキ。

「ゾー馳走様、ありがとなエルザ」

「お粗末さまだ。何たいしたことではない。……ないのだがその…」「ん、どした?」

先ほどよりも顔を赤らめたが、今度は早く心を落ち着かせ目を見ながら口にできた。

「その、また作つてきても良いか?」

「え、良いのか? でも大変じゃないか?」

「そ、そんな事はない! その、自炊の練習にもなるし、食費も抑えられてメリットはたくさんある! ツバキも栄養がしつかり摂れて一石三鳥だ!」

材料費も手間も時間もかかるし遠慮したほうが良いのではと思うツバキだが捲し立てるエルザに気圧される。

「ん一分かつた。じゃ、頼むよ」

「……あ、ああ! 腕によりをかけさせてもらおう!」

妖精女王が妖精王を甲斐甲斐しく世話を焼く。

文字に起こせばとても神秘的な光景。

その光景は薄汚い作業現場を中心に広がつて いるものの、見るもの全ての心をほぐし癒していた。

「ツバキー!!俺と勝負しろー!!」

「アンタはあれ見て何も思わないの!?あつち行つてなさい!」

「ナツー、オイラでも流石に空氣読むよ⋮」

ツバキに向かつて走り出したナツをルーシイが回し蹴りで鎮め、  
ハッピーが毒づく。

今日も妖精の尻尾は通常運転です。

### 3話

再建工事から約1週間後。

妖精の尻尾は仕事の再開を始めた。

普段は中々仕事に行かないメンバーも、今回は行く者たちが多い。再建工事中も依頼は溜まりクエストボードは埋め尽くされていたのだ。

早速取り掛かろうと皆が殺到する。

魔物討伐依頼、探し物の手伝い、学校の授業の手伝い、迷子の猫探しなど寄せられる依頼は実に多種多様である。

ミラジエーンは仮設の受付カウンターで良い笑顔で仕事の受付をしている。

今日も騒がしくも平和な一日が始まると思つていた――

「もう一遍言つてみろ!!」

聞くもの全てを委縮させる怒号が響いた。

声の主はエルザ。

その丞先は――ラクサスに向いていた。

「この際だ、ハツキリ言つてやるよ。弱い奴はこのギルドにはいらねえ。幽鬼の支配者ごときに舐められやがつて。外も恥ずかしくて歩けねーよ」

その後、ガジルにやられたレビイ・ジエット・ドロイ。

元凶であるジュード・ハートフライリアの娘であるルーシィの罵倒を続けるラクサス。

S級魔導士とは1年間で成果を上げ続けた魔導士が難関な試験を突破して得られる数少ない称号である。

ギルドメンバーはその昇格試験のためにも頑張つて依頼をこなす面々もいる。

当然のことくそれを身にしているラクサスは実力は申し分ないのだが、ツバキとは別方向でコミュニケーション能力が足りていなかつた。

「ま、俺がいたらこんな無様な目には合わなかつたがな」

「貴様……」

エルザの怒りが頂点に達したその時であつた。

「……ミラ、この依頼を頼む」

「……え？ あ、良いけど……」

我関せずとクエスト依頼をミラに受付するツバキ。いつものごとく一人で依頼をこなそうとしていた。

ちなみに彼も妖精の尻尾数少ないS級魔導士の1人である。

「おいおい、ツバキさんよ。お前というものがいながらこのザマかい？『妖精の尻尾最強の魔導士』が聞いて呆れるぜ。何なら俺が変わつてやろうか？」

「ラクサスッ！」

ギルドだけでなく愛する者への侮辱もしたラクサスに対しついにエルザが限界を迎えた。

他のメンバーに取り押さえられていたが、いつも冷静な彼女がこうまで取り戻したのだ。

それだけ惚れた相手への発言を許すことが出来なかつたのだろう。一触即発の空気が広がる中、ツバキはここにきても一切ラクサスの方を見向きもしなかつた。

無視しているのではと思い、だんだんとラクサスが不機嫌になる。ちなみに彼は20歳。ラクサスの3つ年下だ。

「ツバキ、てめえ無視かコラ？ 何か言つたらどうなんだ。てめえがいながらこんな惨状だなんて、妖精の尻尾の名折れだぜ？」

バチバチと体から電撃をはじけさせながら詰め寄り、ツバキの肩に手をやる。

いよいよ喧嘩が始まる、と周りのメンバー総出で止めにかかるうとしたのも束の間。

「ん？ あつ、ちょっと待つて。……何だよラクサスか。 いたの？」

ツバキは片耳に手をやり振り返つた。

手にしていたのは、小型通信ラクリマの技術を応用して作られたワイヤレスイヤホン……！

オーダーメイドで作ることが可能！

ゴム製でできているので所有者の耳にジャストフィットすることで、どれだけ暴れてもズレ落ちない！

ノイズキャンセリング機能も付いているので、傍で雷系各種魔法の魔導士が何か喚いていても気にならない！

大迫力のサウンドを一切音漏れせず楽しめる！

この高性能ワイヤレスイヤホンのお値段はなんと、45000J!!

ちよつと高いかもと思つたそこの貴方！

つけて御覧なさい、毎日の過ごし方が、世界が変わるから。気になつた方にはこちらのサイトから申し――

「離れ」

そして迸る雷。

自分に向かつて舐め腐つた態度をとるツバキへ洗礼のつもりで浴びせたラクサス渾身の一撃。

その名も「レイジングボルト」

どんな相手も全身を麻痺させ、即行動不能に陥らせる魔法。ラクサスの必殺技の1つだ。

だが。

「危ない危ない。……急に何するんだ、おつかないな。気をつけろよな」

どこから取り出したのか避雷針を右手に持ち、雷を防いでいた。

その避雷針は蓄電機能も付いているのか、メーターのようなものが側面についていた。

振りきれ寸前までに針が揺れている様子が窺える。

「ツチ……。相変わらず分けわからん魔法を使いやがつて。だがどう

いうことだ？いつもなら意味不明な原理で搔き消していたはず。なぜそんなものをどこからか生み出した？

そう、いつもであればノーモーションで相手の魔法を打ち消すのがツバキのスタイル。

しかし今回は避雷針をどこからか取り出してきたのだ。  
いつもと違うその行動に怪訝になるラクサス。

「いや、ここ1週間仕事に行つてなかつたからな。電気代節約のために」

「俺の魔法はエネ○スか!?」

とんでもない理由で自分の魔法を防がれたラクサスは、自分のキャラを忘れて全力で突っ込む。

先ほどとの雰囲気が完全に壊れてきたその様子に何名かが噴き出している様子である。

普段は高収入のS級クエストや10年クエストで得た報酬で生活を切り盛りしているツバキ。

ここ1週間はギルド・マグノリアの債権で忙しかった為仕事をこなしていなかつたのだ。

まあ貯金は十分にあるのだが。

「そう怒るなよな。……ところでラクサス。『ノブレス・オブリージュ』って知ってるか？」

「はあ？ 知るかよ。それがどうした」

それまでのどこかぼんやりとした雰囲気を改め、どこか真剣さを帶びた表情で見やるツバキ。

その紫焰のような瞳はラクサスを射抜いていた。

どうやらギルドメンバーも知っている者は少ないらしい。

普段本を読むルーシィやレビイ、それにミラジエーンは知っているのか「あ！」と声を上げていた。

エルザは先程までの怒氣を収め、滅多に見られない「ツバキの表情変化 真面目ver」に目を奪っていた。

『ノブレス・オブリージュ』。西の大陸『アルバレス』より更にその向こうの地域で使われている言葉だ。』

ノブレス・オブリージュ。

財産を多く所有する者、

高い社会的地位を持つ者、

そしてこのアースランドの世界では何よりも多くの魔力を持つ者、

高い魔法技術を持つ者、

純粹に強い魔法を扱える者、

総じて高い身分を持つ者には果たすべき義務があるという基本的な道徳観である。

財産を多く所有する者は他者より多くの税金を、

高い社会的地位を持つ者は他者が過ごしやすい街にするために政治を

そして魔法を扱うものは魔法を持たない者を守ることを、徹底すべきだ。

この世界に産まれ落ちた殆どの人間はきっと誰かに守られてきたはずだ。

だからこそ今の自分がいる。

しかしその現状に甘んじることなく、利他精神の心を忘れずに奉仕すべきであるとツバキは主張する。

自分が供給されてそれで満足していくそれで良いのか。

与えられ続けてきた人生だつたはずだ。

これからは自分たちの番ではないのか。

与えられる側から与える側になつて初めて本当の意味での最高の人生、最高のギルドができるのではないか。

そうツバキは語る。

「それができないというならばラクサス、お前の掲げる最強のギルドを目指すなんて夢のまた夢だ。他者を顧みることのできない集団がどうして最強になれる。目の前の仲間を救わずただ己の自己満足のために振り回すなど以ての外だ。」

そう強く言うツバキ。

その言葉にはラクサスを責めるというより諭す姿勢が感じられた。ラクサスは今回的一件、再三の応援要請にも応じず自分の欲求ばかりを通した。

ミラやルーシイの尊厳を穢すような発言も繰り返した。

それでも彼のことを認めているからこそツバキはこの言葉をラクサスに届けたのだ。

マスター・マカロフの孫であるならば感じてきしたこと、思うことがたくさんあつたはず。

それがラクサスにも伝わったのだろう。

彼は渋々「何だつづーんだ、全く」と不貞腐れながら姿を消した。彼の突然に始まつた弁論劇に皆静まり返つていた。

それにふと我にかかるツバキ

「あつ……えつと。仕事行つてきまーす。……やつちまつたなあ、これ」

下を見ながらそそくさとギルドメンバーに背を向け足早に去るツバキ。

圧倒されたものの、どうやらメンバーには届いたようで、口々にツバキを褒め称える声が上がる。

「すげーな、ツバキ！ラクサスを相手にするだけじゃなく口でも勝つなんてよ！俺なんもしてないけどスカッとしたぜ！」

「あい！オイラもそう思うよナツ！」

「そうね。ツバキさんって強いだけじゃなくって、教養もあって仲間を貴ぶ姿勢もあるから素敵ね。エルザが惚れる理由も分かるわ」公然の秘密のはずだが、それでも口に出さずにはいられなかつたルーシイ。

それだけに彼の姿は輝いて見えたのだ。

幽鬼の支配者が弱肉強食のギルドだつたのに対しこちらは何と温かい場所なのか。

圧倒的な強さを持ちながらもあんなにも優しい心の持ち主が所属するギルドに入れて良かつた、とそう思えたルーシイ。

そして少し不器用なだけで本当は誰よりも仲間のことを考えているのだから、とツバキの評価を上方修正した。

「なつ、何故そのことを……!?」

「バレバレよ、エルザ。でも本当に良い男に惚れたわね。羨ましいなあー」

「……あいつを褒めるのはとても嬉しいが。まさかお前もかルーシイ！？」

「いや違う違う！」

ルーシイもツバキに対して浅からぬ思いを抱いたのではと不安になつたエルザは涙目でルーシイを睨む。

全力で否定するも、あまりの可愛さにもう少し意地悪しようかと思つてしまつた。

すぐにその考えは捨てたが。

さて、気を取り直して仕事に行くか！

気持ちを新たにルーシイはナツたちと仕事に行くのであつた。

そしてその晩。

一人屋根の上で次期マスター候補に関して考えを巡らせていたマカロフのもとへミラジエーンが笑顔で凶報を持つてくる。

ツバキのお陰で妖精の尻尾の魔導士であることを誇らしくなり、若干力が入りすぎたメンバーはいつもの如く街を破壊しマカロフは始末書に追われるのであつた。

「引退なんてしてられるかー!!!」

そして夜は明け、いくつかの日をまたぎ。

ナツ、ハッピー、ルーシイ、グレイ、エルザ、ツバキたちは実は星霊であつた口キから貰つたりゾートホテルのチケットでアカネビーチに行くことになった。

## 樂園の塔編

### 4話

青い空。  
白い雲。

輝く砂浜。  
揺れる乳。  
……失礼。

ここはアカネビーチ。

ルーシィが星靈だつた口キを救い、その彼から貰つたチケットでナツたち一行はリゾートホテルに来た。

ガールフレンドを誘つてくる予定だったが、もう人間界に長居する必要性はないため譲つてくれたのだ。

気が早いエルザはクエストでもないのに浮き輪を身に着け麦わら帽子を被り多くの荷物を引いてやつてきた。

高級ホテルということからテンションが上がつたナツたちは早速水着に着替え遊びの限りを尽くしている。

スイカ割りでルーシィに悪戯をし、休んでいた筋肉ゴリゴリのおつさんの頭を叩かせたり。

その腹いせにナツをドラゴンボートに乗せ水上スキー。

魔法を使わない全力のビーチバレーなど。

各々がバカンスを目一杯喫していた。

さて、ここで少し時間を巻き戻そう。

エルザがツバキに水着を見せるところからスタートだ。

「ツバキ！……その、どうだろうか？」

エルザの代名詞でもあるその緋色の髪と、普段鎧を装着し敵をなぎ倒している姿からは想像できないほど華奢で白い肌。

それらが良く映える対照的な、花柄のシンプルな黒のビキニ。  
シンプルだからこそエルザの魅力を遺憾なく発揮しているように見える。

細い肩。

ポニーテールにしたことでチラリと見えるうなじ。

ほつそりとした長い手足に見事な双丘。

豊かに盛り上がった臀部。

それらを覆うわずかな布面積。

男なら一度見たら目を奪われること間違いないしの美貌を持つエルザは顔を赤らめ、ツバキに自信の水着の感想を聞いていた。

「ん、似合つてる。」

たつた一言。

てめえこれだけの絶景見といてそれだけか、この野郎。

と思わなくもないが、どうやらそれだけで当の本人は嬉しかつたご様子。

やはり好きな人から褒められると嬉しいのですね。

「そ、そうか！ そ、うだろうそ、うだろう！ よし、それではあそこに行つてみようではないか！」

すっかり機嫌を良くしたエルザに手を引かれ歩き出す一人。

しかしあまり表情が変わっていないように見えたツバキも心の中では。

「（エルザ綺麗だな。 ていうかスタイルやば。 ホントに19歳？ あつ、手柔らか）

煩惱まみれであつた。

日が沈んだその晩。

エルザはデッキエリアに座り、今日一日を思い出しながら休んでいた。

久しく普段のしがらみを忘れ思う存分に楽しんだ日。

カンカン照りの太陽の下でおかしくなったのか、少しはしゃぎすぎたなど苦笑する。

普段は奥手で自分の抱える揺れ動く恋情をうまく言語化できずあまりアプローチできないエルザ（初心とも言う）。

それが今日はいつもと異なり心の思うままに行動できていた。

ツバキの腕を引き海の家の売店メニューと一緒に食べ（焼きそば50人前かき氷30人前）、

砂浜に絵を描いたり（画力の差を見せつけられた。ちなみにツバキ／エルザ）、とにかく連れまわしたのだ。

「（少しやりすぎたか……？もしや引かれてしまったのでは……）」  
と不安になるエルザ。

大丈夫っす、あいつ結構煩悩まみれの思考でいっぱいだったんで。そんなことを知る由もなく少々気落ちしたまま眠りに落ちる。

見知らぬ場所で見知らぬ塔をつくり上げている。

そうしているのは鎖に繋がれ一列に並ばされた者たち。  
休むことは許されない。  
少しの失敗は許されない。

感情を表すことは許されない。

老若男女問わず、様々な者たちが奴隸として終わりの見えない労働を強いられている。

醜悪な生活環境の中、衣食住も満足に甘受できないままに延々と搾取され続けている。

隣の仲間が命を落としたとしても、弔えないままに目の前の仕事へと没頭させられる。

仕事が出来ない者や遅いものは鞭を持ったものに裁かれる。  
拷問部屋へと連れていかれる。

際限のない惡意に晒され続ける。

次は自分の番かもしれない。

その恐怖心の中、奴隸たちは只管働く。

手足が麻痺し、

飢餓で動かず、

意識は朦朧とし、

それでも働く。

弱肉強食なんて生ぬるい。

善良な者たちが、太刀打ちできない理不尽の下でその尊厳を奪われ続けている。

法も倫理も道徳も度外視した異常な環境で凌辱され続け続ける。

それは緋色の髪を持つ少女も同様だった。

度重なる惡意の中での労働は、年端もいかない少女にとつて耐えがたい苦痛であつた。

蓄積した疲労で倒れた少女に対し鞭が振るわれる。

あまりの恐怖に、

あまりの苦痛に、

あまりの屈辱に、

その理不尽さに、

目を閉じる少女。

『エルザ。この世界に自由などない』

「……ハツ!?

そして目覚めるエルザ。

震える体に止まらない発汗。

時間をかけて落ち着かせることで漸く自分が悪夢を見ていたことを自覚する。

「(ここ)最近はなかつたのだがな)」

ツバキと出会いその心の氷を溶かしてくれてからは見ることのなかつた遠い過去の記憶。

寝る直前、ツバキに対して感じていた少しの不安が思い起こさせてしまつたのだろうか。

思い出すだけでもまた体が震えてくる。

そして目覚める直前に聞こえたあの声。

今もどこかで自分を縛り続ける奴の声。

評議会にいるあの男と瓜二つの顔を持つ旧い人物の顔を思い出し、「エルザ?」

後ろから聞こえてきた、自分を安心させてくれる声。

ツバキが首をかしげながらエルザを呼んでいた。

「ツバキか。どうしたのだ?」

「いや、ナツたちが地下のカジノに行くって言つてたから呼びに来た。行くか?」

「そうか。では私も行こう」

いつの間にか体の震えは止まっていた。

我ながら現金な女だな、と苦笑しつつ換装しゴージャスなドレスに変身するエルザ。

背中が大胆に開き、スリットが腰の近くまで入っているその妖艶な

ドレスでツバキを連れて会場へ向かう。

「（たまには良いじゃないか。自分に優しい日があつても）」

「なあエルザ」

「？どうしたツバキ？」

不意に呼びかけるツバキ。

一体どうしたのかと問い合わせ返すが

ポン。

とエルザの頭に手が乗る。

「深くまでは聞かないさ。ただ……大丈夫か？」

頭上の掌と自分の目を見つめるその紫の瞳から感じる温かさに心が和らぐのを感じる。

心配させて申し訳ない、と思うもその心地よさにもう少し味わいたいと思い体をツバキに預けその背に手を回すエルザ。

「大丈夫さ、ただ少しだけこうしてても良いか？」

「お望みのままに」

聞こえてくる心音に耳を傾ける。

どこまでも自分を安らぎを与えてくれる存在に。  
たとえこの感情がただの依存だつたとしても。

どうか今だけは。

「（う……。エルザの為だ。我慢しろ俺いや無理だちよつと押し付けすぎじやねやばいエルザにバレる）」

「（ふふ。少し心臓が早いな。余裕そうに見えて反応がこうではな。だがそれに喜んでいる私も私だが）」

そして暫く経ち、カジノへ向かう道中。

「すまない、迷惑をかけたな」

「お安い御用さ（役得ではあつたし）」

先程へのお礼を伝えながら会場に向かう2人の雰囲気はいつも通りであった。

「ツバキはカジノは得意か？」

「あんまりやつたことないんだよな。そういうエルザは？」

「ポーカーは得意だ。どれ、一つ勝負してみるか？『勝った方が何か一つ相手の言うことを聞く』でどうだ？」

「手加減してくれよ？」

両手を挙げながら首を振るツバキ。

その姿をみて笑いながら勝負に勝つたら何をお願い事をしようかと考え始める。

もう勝つた氣でいる様子だ。

浮かれ気分で軽い足取りでさあ取り掛かろうとし、カジノ会場の扉を開けた。

「な、これはどういうことだ……!?」

会場は騒然としていた。

騒ぎの中心はナツたちであつた。

いつもの如く新聞記事の見出しにできそうな類の騒ぎではない。

ナツは口に銃を突き付けられ、

グレイは巨漢の男に背後をとられている。

ハッピーとルーシイは互いを抱きあつて座り込んでいた。

周りの客はその異様な事態にパニックになり、既にほんどんどいな

い。  
「エルザ、来るな！」  
「ぐえぐが！ぐぐが！」

「エルザ、こいつらの目的は……！」

ナツとグレイがこちらに向かつて叫ぶ。  
が、

「久しぶりだね、エルザ姉さん」

そう声をかけてきたのは、色黒の肌に金髪の髪のホスト風の男。ツバキが誰か問い合わせようとしたその時

「ショウ……」

驚愕に目を開かせたエルザがその男の方を向き硬直していた。

置いてきた過去。

その清算の時がエルザに迫つてきていた。

## 5話

「ショウ……」

驚愕の表情で、震える声で相手の男の名を口にするエルザ。  
なぜここにいるのだといわんばかりに、その大きな瞳で訴える。  
どうやら旧知の仲であるらしいということは何となく掴めたツバキ。

だが、なぜエルザがこんなにも動搖しているのかが掴めない。  
そして

「ここにいたかショウ。そして……エルザ」

「久しぶりだな。すっかり色っぽくなつちまいやがつてヨ」

また2人の男が現れた。

大柄な体躯と僧侶のような印象を抱く服とゴテゴテしたもので顔を覆う大男。

ファミコンから出てきたキャラクターのような男。

……後者は人間なのか少々怪しいが。

「シモン。そしてその声はウォーリーか…？」

「きやあつ!? 何すんのよ!？」

「つ?! ルーシイ、どうした!?’

そして少し離れたところにいたルーシイは縛られていた。

そのロープの持ち主は猫がそのまま人間になつたかのような少女。解こうにもかなり頑丈な模様で、もがけばもがくほどに強く絡まつていく。

更には魔力を封じる効果もあるのか、ルーシイは必死で鍵で星靈の扉を開こうにも何の反応もない。

「ミリアーナか…。お前たち全員魔法を覚えたのか…」

「驚くことはない。コツさえ掴めば誰にでもできる。なあ、エルザ?」

余程肩身が狭いのか、エルザの声にいつもの霸気はない。

「エルザ、無事か!？」

「この野郎、テメエら何者だつ!」

そこへ遅れてナツとグレイ、そしてなぜか幽鬼の支配者にいたはずのジユビアが駆けつける。

グレイはジユビアに守られ無事。

ナツは銃を発射されたものの何故か無事なようだ。

いつもと様子が違うエルザを気遣うグレイに、目の前の者たちの素性を問うナツ。

油断していたとはいえ自分たちを一時力づくで抑え込んだ魔導士たち。

いつでも戦えるようにと臨戦態勢をとる。

「私が妖精の尻尾に来る前の仲間たちだ……」

グレイの問いにはエルザが答えた。

顔を俯かせたまま。

「『姉さんが俺たちを裏切るまでは』だけどね』

「よせ、ショウ。ダンディな男は感情を抑えるモンだぜ』

ショウの一言が突き刺さったのか、顔をしかめるエルザ。

「さあ、エルザ。帰ろう。』

「でないと、この嬢ちゃんも……』

「ひつ……』

彼らはエルザを昔の仲間であり、連れ戻しに来たと宣う。話が見えないまま、ルーシイを人質に交渉してくる彼ら。久しぶりに会つた仲間が、現在の仲間に牙を向けている。この現状でどうにかなつてしまふ。

追い詰められたエルザはその脅迫に乗るしかない、と思われた。

「……断る

「……ん？ 聞き間違いか？』

無関係のルーシイを救うには彼らに従うしかない。

そう判断したエルザは大人しく彼らに投降するしかない。

それなのにエルザの口から出たのは否定の声。

現状がうまく認識できていないのか。

確かに俺たちと会うのは久しぶりだ、混乱するのも仕方がない。

そう思つたシモンたちはもう一度問う。

「エルザ。次はない。俺たちと一緒に来い。さもないとこの嬢ちゃんの頭をぶち抜くぞ？」

二度にわたつて脅しをかける彼ら。

しかしエルザはやつと動搖が収まつたのか、少しずついつもの姿を取り戻していた。

理想像を掲げるウォーリーが、  
あの優しかつたショウが、  
純粹無垢なミリアーナが、  
真面目なシモンが、

平氣で命を天秤にかける行いをする。

それに対しても多くの疑問を頭の浮かべたエルザ。

しかし今はそれを頭の片隅に追いやり、目の前の状況を打破すべく心を持ち直す。

その瞳はよく目にする女魔導士エルザの瞳であるとルーシィは知つていた。

とはいえどうやつて救つてくれるかは不明だが。

現に銃はしっかりと己の頭に突き付けられている。

「聞こえなかつたか？ではもう一度言う。断る……！」

「正氣かエルザ！この女の命が惜しくないのか？」  
「どうなつても知らないよエルちゃん？」

なおも搖るがないエルザの決意。

おかしいと少し焦りだす彼らに対しどここまで落ち着きを伴うエルザ。

そしてナツとグレイもその後ろから睨みを利かす。

こちらの方が有利なはずだ。

だというのに。

なぜこちらの要求を受け入れない。

なぜ精神的に屈服しない。

当惑の感情は彼らを支配する。

まさか本気で見殺しにするつもりなのか。

「お前たちも分かつてているのか？」

果たしてシモンたちの浮かべた疑問にはすぐ答えが出た。

「妖精の尻尾に手を出したらどうなるかということを!!」

「はいよ、形勢逆転だな」

殺伐の空氣の中で響くは二人の声。

凜とした佇まいに彼らに啖呵を切るのはエルザ。

ぽけーっとした声はツバキである。

そう、ツバキの存在がエルザたちの精神的優位の理由であった。彼の手にかかるればいつでもルーシイを救い出すことが可能だからである。

ツバキはルーシイを横抱きに、そして少しドヤ顔で姿を現した。彼が今まで口も開かずに気配を薄め、目の前の惨状をやり過ごしていたのはなぜか。

現状を把握し、会話から想像できる限りのエルザと彼らの人間関係を整理するためだ。

まずは落ち着いて。

どんな時も常に余裕をもつて優雅たれ。

戦場でもいち早く落ち着きを取り戻す。

そして自分の現状を把握し理解に努める。

次なる最善の行動をする者が最後まで生き残るのだ。

でもやつぱりわからないので静観を諦めついに腰を上げ、ルーシイを助け出したのだ。

まあ考えても仕方ない時はとりあえず動けば何とかなることがある。

「いつの間に……！」

「みやあ!? 私のロープが……！」

切った形跡もなくとも簡単に解いてみせたツバキに驚愕の表情を浮かべるミリアーナ。

解放されたルーシイはナツたちのところへ戻り、同じく臨戦態勢をとる。

「燃えてきたぜ……!!」

「よくもやつてくれたわね」

「覚悟はできているんだろうな？」

魔法の準備に取り掛かるナツ、ルーシイ、グレイ。エルザはこうなることが予想できていたのだろう。

その瞳に迷いはなく、彼らを見つめる。

こんなはずでは、と表情を歪めるシモンたち。

一気に盤面をひっくり返された彼らはどう現状をやり過ごすか、必死に考えていた。

「まあ待ちんさいや」

対立する彼らの中央に歩み寄るのはツバキ。誰もがその行動に目を見張る。

ツバキはなぜこんなことをしでかしたのか彼らからその理由を聞こうとしていたのだ。

「何やつているんだよ、ツバキ！」

「こいつらは妖精の尻尾に手を出したんだぞ！」

「だから手をあげるつて？それは違う。俺たちはまだ何もお互いを理解していない。すべてが終わつてから分かつても『もう遅い』なんてことはなくして置いた方が良いのさ」

安易に手をあげるなとツバキは言う。

現状、どう考えててもこのまま激突すれば軍配はナツたちに上がるだろう。

しかしそれで手を出しても意味がないのだ。

「俺たちは法も道徳も分からぬ子供ではない。感情のままに行動し力を振るう歳ではない。相手の立場にたつて物事を考えられる大人なんだ」

妖精の尻尾にでることに誇りを持っているのであるならば。

その行動にも、妖精の尻尾であるということを覚えておくべき。

今俺たちは新聞の記事に載るようなバカをしようとしているのではない。

命を懸けた行いをしようとしているのだ。

ツバキのその言葉に振り上げていた拳を収めるナツたち。エルザも少しバツが悪いのか難しい表情を浮かべていた。

「だからさ、話してくれよ。何でこんなことをしたんだ？」

自分たちにここまでした相手を慮る行動をとるツバキ。

その姿に毒気を抜かれたのか、楽な姿勢に戻る妖精の尻尾一同。シモンたちは信じられないようだ。

それでも

「それでも、俺たちは姉さんを！儀式のために！理想とする世界のために連れて帰らないといけないんだああああっ！！」

そう激昂するショウ。

そんな彼を皮切りに魔法を発動しツバキに狙いを定めるシモン、

ウォーリー、ミリアーナ。

カードが、ロープが、闇が、ポリゴンがツバキに襲い掛かる。  
「やれやれ、質問に答えてくれないかねえ」

「ツバキさん危ない！」

「大丈夫さ」

ツバキの身を案じて声をかけるルーシイだったが、彼女を宥めるエ  
ルザ。

その間にショウの魔法によりカードの中に捕らわれたが。  
「あいつが負けることはない」

「……ハハハ、大口を叩いた割にはそんなものか!!」

「面白い魔法だね。まあ効かんけど」

「何!?」

あつさりとカードの中から出てきたツバキに開いた口が塞がらな  
いショウ。

内部から出るにはショウの意思がなければ。

外部からの影響もプロテクトを施せば寄せ付けないはずのカード。  
それをツバキはひよい、と道端に落ちた石を跨ぐように空間を超  
えてきた。

続いてミリアーナの縄が絡まり、そこへウォーリーの銃が飛んでく  
る。

しかし、それもツバキはロープを一瞬で自分のすぐ隣の虚空へ移動  
させ、銃弾も手を翳して搔き消した。

ロープは縛る相手を見失い地面へスルスルと落ちる。

本来ツバキの魔法であれば別に手を翳さなくても良いのだが、人間  
誰しも目前に銃弾が迫つてきたら「腕で顔を隠す」くらいの防衛本能  
の働きは出るものだ。

「どういうことだヨ！」

「みやあ、また私のロープが！」

2人が理解する暇もなかつた。

更に今度は闇がツバキを覆う。

視界の悪い中でツバキに殴りかかるもすぐにその闇は晴れる。  
まるで闇なんてなかつたかの如く。

「そんな……」

「ほいさ」

全く本気を出した様子もなく彼らをあしらうツバキ。

その姿をみて遂にシモンたちも諦めがついたようだ。

「さて、危害は加えないし他言もしないから話してくれ。何故こんなことをしたんだ？」

頭を垂れる彼らに歩み寄り、しゃがみこみ目線を合わせるツバキ。

そしてショウが口を開き

「くつ……殺せ」

「やめろキモイ。本当に殺すよ？」

「いやオイ！」

それ誰得なセリフを呴いたショウに割とマジ切れするツバキ。  
思わずエルザが突っ込んでしまったのも仕方がない。  
さつきまで力説していたのはどこのどいつだ。  
まあ男が言つても確かにアレだが。

そしてリーダー格のシモンを中心に事情聴取することと相成った。

そして場所は打つて変わつて魔法評議会場E.R.A.  
Rシステム。

話は早いが、これが楽園の塔の正体だ。  
ジエラールはこれを利用して黒魔導士ゼレフの復活を試みようと  
しているのだ。

評議員の一人であるジークレインはその危険性を説明し、  
サテ  
衛星魔法陣工一テリオンの使用を訴えていた。

辺り一帯を消し飛ばす、評議会が所有する数少ない最終兵器のうちの1つ。

Rシステムの危険性は言うまでもない。

跡形もなく消し去るにはこれしかないのだと。

頭を悩ませる他の評議員。

……それすらも計画のうちであると、魔法界の秩序を守らんとする評議会に潜む悪が蠢いていることに気づかないまま。

そしてその惡意の中心にいるジエラールとジークレインは、心の中での喧いが止まることを知らなかつた。

「（ウルティア。お前も賛成票をあげるのだ。俺たちの目的のために）」

「（はい、ジークレイン様）」

念話を通して口裏を合わせるジークレインとウルティア。  
もう少しで計画が完成に近づくと、心を躍らせた様子で。

しかし、ジークレインは気付かない。

（ジークレイン様。貴方様の望みが叶うことはないでしょう）

己の思想は全て、仮初であるといこと。

ジークレインは気付かない。

その思想は、傀儡であるはずの己の側近に操られ創られたものであること。

そして……

（それにどうやらツバキが楽園の塔へ向かっているらしいとのことですし。……強くなっているのかしらあいつ）

その仮初の理想ですら叶うはずがないということを。

ジークレインは気づかない。

シモンたちからの事情聴取を終えた一行は楽園の塔へと向かつていた。

あまりにもかけ離れていたエルザの人格にシモンを除いた彼らは当惑していた。

無理もない。

ジエラールからは自分たちを裏切った、と聞かされていたのだ。それでもシモンだけはジエラールを怪しんでいたようで、エルザと彼らの認識の齟齬をいち早く理解しショウたちのケアに努めた。

楽園の塔組はジエラールの裏の顔を知り、困惑したもののが彼に話をつけに行かんと船は進む。

妖精の尻尾の面々は、明かされたエルザの過去の話を聞き怒り心頭になつたがツバキに宥められ楽園の塔へ行くことを決意。

こうしてエルザを取り戻しに来たということは何か企んでいるに違いないとエルザは踏んだからである。

ナツは波に揺られ酔い潰れながら。

ルーシイは鍵の手入れをしながら。

グレイはジュビアに絡まれながら。

エルザは遠くの方を見つめながら。

シモンは座禅を組み瞑想しながら。

ショウはカードの面を憂いながら。

ウォーリーはたばこを吸いながら。

男たちはこの後に起ころる激戦を予期しているのか、まるで決戦前の精神統一の如く。

静かに船は進む。

そんな中、樂園の塔組唯一の女性・紅一点のミリアーナは。

「げんきさいきよーー！」

「さいきよーー！」

「さいきよー。ほーれ、よしよし」

「「みやあ……（＼＼＼＼）」」

ツバキとハッピーとじやれていた。

動物好きなツバキは猫のハッピーだけでなく、猫を愛するあまり自分も猫みたいに行動するミリアーナも愛でていた。

それぞれの顎の下を両手で撫でながら他の者たちとは異なり、全力で和んでいた。

その撫で方は最&強らしい。

「な、なにをやつとるんだあああつっ!!」

スパーントツバキの頭に振り下ろされるハリセン。

持ち主は勿論エルザである。

換装で取り出したのか。

「痛つ。何をするエルザ」

「こちらのセリフだ！お前はこんなときに何を！・ミリアーナと、その、いかがわしいことをしあつて！ミリアーナ、貴様もだ！」

「えー。だつてエルちゃん、ツバキ君すごい撫で方上手いんだよ。気持ちよくなるのも仕方ないって〜」

「ツバキオイラもオイラも！……エルザ、もしかして羨ましいの？」

「なつ、そ、そんなわけなかろう！そんなわけ……」

瞬間エルザの頭に繰り広げられる妄想。

「えるぞ」と書かれた首輪を下げ、際どい衣装に身を包め猫のコスプレをした己の体にツバキが触れる。

頭、頸の下、おなこ、脇、尻尾。

様々などころを触れられ、撫でられ、愛でられ。

そこからさらに過激などころへ手が伸びようとしたところへ遂に

エルザが限界を迎える。

「# \$\$ % & , & \$ = ) ~ \* - - \times \times !!!」

「でえきてえるう」

「大丈夫か？」

真っ赤な顔をして倒れたエルザ。

巻き舌風にからかうハツピー。

すっかり緊張感が途切れた一同は、先程と比べ幾分カリラックスした雰囲気で船を進める。

ナツはまだ死んでいるが。

そんな年相応で初々しい少女のような反応のエルザを見てシモンたちは苦笑いしながら、彼らとエルザが出会えたことを喜んでいた。

そして楽園の塔に着き、ツバキの膝の上で目を覚ましたエルザはまた氣絶するのであつた。

禍々しい塔。

そんな印象を覚える。

誰も寄せ付けない、入り込んだら最後、生きては帰さない。

労働者たちの無念か、黒魔術団体の狂氣か。

ここに蔓延る空気は確かに淀んでいた。

そして岸に船をつけるも、違和感を感じる。

見張りも防犯カメラらしきものも何一つないのだ。

着岸した時点での襲撃を確保していたが何も起こらない。

「どういうことだ。ジエラールは俺たちが裏切ったことも、ここに既にいることも分かつてているはずだ」

怪しむシモン。

他の面々も辺りを警戒する。

「！ 何だ？」

地面に口のようなものが生えた。

次の瞬間、辺り一面にそのくちのようなものが生え茂った。悍ましい光景に鳥肌を立てる一同のもとに、それらの口が一斉に開いた。

「ようこそ皆さん、樂園の塔へ」

「俺の名はジエラール。互いの駒は揃つた。」

「そろそろ始めようじゃないか」

『樂園ゲームを！』

一つ一つの口が喋り始め、異口同音で締めくくる。

ジエラールは落ち着いた、されど自信に溢れた口調で放送を続ける。

そして話される樂園ゲームのルール。

妖精の尻尾とシモンたち vs 暗殺ギルド髑髏会特別遊撃部隊  
トライニティレイヴン

「三羽鳥」

エルザを生贊にゼレフ復活の儀を行い樂園への扉を開けばジエラールの勝利。

それを阻止し三人の戦士、そしてジエラールを倒せばツバキたちの勝利。

バトルロワイヤルの開始と相成つたが、ここで凶報が一つ知らされる。

評議会は衛星魔法陣による究極魔法、エーテリオンでこの塔を消滅させる気なのだとか。残り時間は不明。

しかしエーテリオンが落ちるとき＝我々全員の死だということ。そしてゲームスタートの合図がなされる。

最上階へ一気に向かうナツ。

その後を追うグレイとシモン。その後を追うグレイとシモン。そのグレイを追うジュビアと、放つておけないと追走するルーシイ。

残つたツバキ、エルザはジエラールのもとへ。

足手まといになるやもと思つたウォーリーとミリアーナとはここ

で全員の帰還を信じ、船を守りながら待つことに。

ショウもエルザについていこうとするも、エルザに説得され残ることに。

ツバキも付いているのであれば大丈夫だろう、と納得しエルザの言葉を受け止めた。

そして各戦局はなど。

s c e n e 1 : ナツ・グレイ v s 鼻

「ホー ホホウ」

「あんのクソ炎…！」

鼻に撃墜され、丸のみにされたナツとグレイ、そして後方からケガをしたため見守るシモン。

グレイが氷刃・七連舞でナツを吐き出させ、そこへ火竜の鉄拳でとどめを刺す。

「なに鳥に食われてんだこの野郎。ドラゴンじゃなくて鳥に食われる蜥蜴か何かかてめえは？」

「仕方ねーだろ、口ケットに捕まつて酔つちまつたんだから。お前がいなくとも自力で這い出てこれたんだよ！」

見事倒すも喧嘩を始めるナツとグレイ。

s c e n e 2 : ルーシイ・ジユビア v s ヴィダルダス・タカ

「キヤハハハ！さてどうするよ金髪ーう？」

「地獄地獄地獄！最低で最高な地獄を見せてやるよ！」

「ちよ、ちよつとジユビア!?」

ヴィダルダス・タカと操られたジユビアに相対するはルーシイ。

ジユビアが展開した水のなかで呼び出したアクエリアスで巻き返し、<sup>ユニゾンレイド</sup>合体魔法で打ち倒す。

「なんてところから出してんだてめえは。次はトイレにでも出す気か？」

「ゞ、ゞめんなさい」

アクエリアスにどつかれながらも見事勝利。

s c e n e 3 : エルザ v s 斑鳩

「(こいつ、強い……!)」

エルザの対戦相手は三羽鳥最後の1人斑鳩。

彼女の剣技は見事なものだつた。

たとえその剣が暗殺したものたちの血で塗れていたとしても。

様々な鎧は剣を持つエルザは剣に自信を持っている。

近距離中距離遠距離。

様々なスタイルに合わせて戦闘方法を柔軟に変えるエルザはどんな敵にも対応できる。

ツバキがトイレに行つてから現れた斑鳩とエルザはそのまま剣で双方から斬り合つていた。

が、斑鳩が圧倒していた。

暗殺ギルドとして数多くの仕事をこなしてきた彼女は知っているのだ。

どこを斬れば人は壊れるか。

どこを斬れば人は痛むのか。

どこを斬れば人は死ぬのか。

人体の急所を全くの躊躇なく傷つけられるかそうでないかの差が、この戦闘に出てているのだ。

天輪の鎧、

炎帝の鎧、

煉獄の鎧。

いずれもエルザが信を置く鎧たちだが、斑鳩はその悉くを斬り伏せた。

「(何かないか、有効な鎧は……!)」

次なる一手を模索するも、その間に降り注ぐ刃の嵐。

焦つて鎧を開しても上から切り伏せられるのは目に見えている。それでもエルザの限界は近づいていた。

最早ここまでかと一瞬諦めたその瞬間、脳裏にチラつく記憶。  
妖精の尻尾の仲間たちとの楽しい記憶。

ボロボロでギルドに入り、他人を寄せ付けなかつた自分をとてもよくしてくれた。

ナツ、ルーシイ、グレイ、ミラ、カナ、エルフマン、ロキ、マスター。他にも多くの魔導士が自分に仲良くしてくれた。

弱い自分と弱い心を守るために纏つた鎧。

それは人と人との心が届く隙間を鎧で堰き止めていただけだつた。

彼らとの出会いが、

彼らとの過ごした時間が、

エルザに人と人との距離はこんなにも近く温かいのだと教えてくれたのだ。

そして

「何泣いてんだ？」

涙を流す自分に傘を差してくれた愛しい人。

「何があつたかは聞かんけどさ。ここ俺のお気に入りの場所なんですよ。ここにいる間は笑っていようぜ？」

深入りせずにただ自分を受け入れてくれた愛しい人。

「過去に何かあつたのは分かるよ。忘れるなんて無責任なことは言わないさ。」

「でもきっと、これから楽しいことが必ずやつてくる。そのときに上手く笑えないと勿体ないぞ？ほれ、ツバキさんと練習してみよう」道を示し、一緒に歩こうと手を伸ばしてくれた愛しい人。

妖精の尻尾の仲間が、ツバキがエルザを奮い立たせ、決意の装束へと身を包む。

魔力など一切帶びていないその装束は、守りを捨てただ攻撃力に傾いたもの。

自分が守らてきたものを、今度は守るために力を振るう一心。勇気をもらい、立ち上がり、この装束に着替えたエルザにもう怖いものはない。

「ここまでどす！覚悟オオ！」

「私の全てを強さに変えて討つ！」

果たして軍配はエルザの方に上がる。

膝をつくも、剣を支えに倒れないエルザ。

疲弊し切った彼女のもとへ響く足跡。

「ハアハア……。全く待ちくたびれたぞ」

「いやすまん。腹が絶好調で」

「お前という奴は……」

頭に手をやり呆れ返るエルザ。

その口元は苦笑で歪んでいた。

改めてツバキが好きだとということを思つたエルザ。

「迷惑料だ。頭を撫でろ」

「はい？どうしたエルザ？トイレ入つての間轟音が聞こえたけど、やつぱり何か

「撫でろ」

「はい」

言われるがままにその緋色の髪を撫でるツバキ。

船でここにくるときにミリアーナにしていたのを思い出し、急にしでもらいたくなつたのだ。

柔らかく良い匂いがするその髪を撫でているツバキにとつては溜まつたもんではないが、エルザが嬉しそうなので黙つている。

満足いくまでに続けてもらい、その後深呼吸し意識を切り替えるエルザ。

「ふう…。待つていろジエラール。今決着をつけに行くぞ」

「ねえ今のどういう意味があつたんだ？お望みなら全然まだやるけ

ど

「……後で頼む」

残るはジエラールただ1人。

魔法評議会は着々とエーテリオン発射の準備を進めていた。

「いよいよですねジークレイン様」

「ああ。ようやく俺の理想が実現する」

ジークレインは震える。

もうすぐ自分が消えてしまう恐怖か、武者震いか。

それでも彼の顔は嘆きの表情は一切なかつた。

2人はこれから起ころる展開にほくそ笑む。

しかしウルティアはその笑みの質がジークレインとは異なつた。

「（ごめんなさいね、ジエラール。これも私の目的のため。それにツバキがいたらもう何をやっても無駄なことですし。彼の魔法には誰も敵わない）」

「時のアーケ」と呼ばれる失われた魔法<sup>ロストマジック</sup>を使うウルティア。

物質の時を操る超魔法。

その彼女が畏怖するツバキの魔法。

ジエラールの理想はどうなるのか。

ツバキの魔法の正体は何なのか。

エーテリオン発射まであと15分。

全員が三羽鳥を打倒したこと。

エルザは持つていた通信用ラクリマで全員を塔から離れさせることを呼び掛けた。

塔の全権を握っているジエラールが、塔の内部にいる者に牙を剥く可能性があるからだ。

「だから頼む。皆ここから離れるんだ」

「何言つてやがるエルザ！お前見捨てて行けるわけねえだろ！」

当然妖精の尻尾組は猛反対。

特にナツは怒り狂い今にもこちらへ飛んできそうだ。

樂園の塔組は何も言葉を発さないが気持ちはナツたちと同じであることは言わずもがな。

エルザは言う。

奴は狡猾な男。

何を仕出かしてくるかはわからない。

奴が何を考えてこんなことをしたのかわからない。

エーテリオンがあと10分強で落ちてくるこの状況で、皆を守りながらジエラールを倒すのは困難であると。

奴があそこまで堕ちてしまつたのには自分に責任がある。  
だからこそ決着をつけに行くのだと。

最後にエルザはこう付け加えた。

「それに私なら大丈夫だ。ツバキが共にいる」

その一言で先ほどまで激昂していた一同は鳴りを潜めた。

彼ならエルザを必ず連れて帰つてくると確信しているからだ。  
今すぐに駆け出したいが、彼らの邪魔になることを痛感する。  
渋々納得した一同は船を出し、最後にエルザに投げかける。

「……わかつた。その代わり約束だ。必ず帰つて来いよ」

「ああ、分かつてゐる」

双方は約束を交わし、暫しの別れとなつた。

数分前のこと。

「ツバキ、皆を連れて塔から離れてくれないか？」

「何で？」

理由はナツたちに言つたものと同じ。

それに加え、ツバキには傷ついてほしくないという思い。

それが混ざり合い悲痛の表情を浮かべながら懇願する。

「断る」

「そんな、何故……！」

「まさかとは思うが、死ぬつもりじゃがないよな？」

「！」

はつきり言つて状況は最悪だ。

これはジエラール側にも言えることだが。

エーテリオン発射までもう間もないのだ。

残り僅かな時間でジエラールを倒し、ここから逃げる時間など残されていないのではないか。

そう思つてのツバキの発言だ。

「俺ならなんとかできる。だからここに残る」

「でも、これは私の問題だ！」

「知つているよ。でももうエルザは1人じゃない。妖精の尻尾のエルザだ。最早その命はエルザ1人のものではない。それを分かつているのか？」

鋭い一言を言われ押し黙るエルザ。

仮にここで命を落として誰が喜ぶのか。

残された者たちが悲嘆に暮れるだけだ。

後悔に襲われてしまい咽び泣くだけだ。

勝手に死ぬなんて馬鹿のすることだと、昔どこかの海の海賊王が言つた。

それをエルザに伝えるツバキ。

「俺なら最悪なんとかできる。だからさ……存分にジエラールをぶん

殴つてこい

あくまで戦うのはエルザであると。

自分は手出ししない。

だからこそ思う存分に力を振るえと背中を押してくれるツバキ。それに張りつめていた肩の力を緩め、竦めるエルザ。

「……お前にはいつも諭されてばかりだな。……」こうなつては仕方ない。地獄の門までついてきてもらうとするかな

「縁起でもないな」

先程までの悲痛な表情はどこへやら。

冗談を言い合えるくらいには余裕が出てきたのか、微笑むエルザ。2人は最上階へと進みだす。

その道中、ツバキはエルザに疑問を投げかける。

「なあエルザ。一つ聞いていいか？」

「何だ？」

「Rシステムって言つたよな、この塔の正体。……あいつ何が目的なんだ？」

Rシステム。

一人の生贊の生命を捧げる代わりに一人の死者を蘇らせる魔法。評議会が使用を厳重に禁止している禁忌魔法の1つである。

昔、とある黒魔術教団がその狂気に魅せられ作り上げたのがこの楽園の塔。

エルザたちはその際に奴隸としてこれを作り上げさせられていたのだ。

「奴の目的はゼレフ復活、その為に私を生贊にしようとして——」「それ以前の問題だ。それを行うための魔力が足りない」

そうなのだ。

この大掛かりな魔法を行使するのに必要な魔力量は実に27億イデア。

大陸中の魔導士を合わせても足りるかどうかというほどの魔力である。

ジエラールは一体どこからその魔力を用意するというのか。

「確かに……。やはりあいつに直接聞かないと分からんな」

「ああ……」

エーテリオンの発射は文字通り死だ。

にもかかわらず、悠然と待ち構えているジエラールに対し疑念を抱くツバキ。

「(さつき塔の構造を観察していたが、まさか……)」

彼の脳内では1つの突拍子のない仮説が立ち上がっていた。

「やれやれゲームはもう終わりか」

「人の命で遊ぶのがそんなに楽しいか?」

「楽しいさ。生と死こそが全ての感情が集約される万物の根源。逆に言えば命ほどまもなく虚しいものはない」

やがて最上階に達し、物々しい部屋にて。

エルザとジエラールは会合する。

「あんたはどう思うよ、妖精王。まあゲームに参加しないで一体どこをほつつき歩いていたのか。怖くて隠れていたのかい?」

「いや、ちよいと腹が痛くなつてトイレ借りていた」

ツバキのマイペースぶりには流石のジエラールもペースを崩される。

「……まあ良い。久しぶりだなエルザ。いつでも逃げられたはずだとと思うが?」

「かつての仲間たちを解放しにな。あと10分足らずでエーテリオンは落とされるが何を考えている?その余裕ぶり、やはりハッタリか」

「(……)」

辺り一帯を消滅させる超魔法。

ツバキがいるから助かると確信しているとはいえ、それだけの魔法があと少しで撃ち込まれるのだ。

ツバキがいてもなお焦る気持ちがあるというのに、ジエラールは見たところ全くその余裕な姿勢を崩そうとはしない。

「何を考えていようが、関係ない。ここでお前を倒し、この8年間に終止符を打つ！」

「何をやろうが無駄だ！ここで朽ち果てゼレフの生贊となる、それがお前の運命だ！」

エルザとジエラールが激突する。

ツバキはエルザの意思を尊重し、一人離れたところで見守る。

エルザなら問題ない、と信じているからこそ自分は手を出さないと決断した。

「（油断しおつてからに。後で必ず貴様もエルザのもとへ送り届けてやろう）」

ツバキを目の端でとらえつつ、エルザに向けて魔法を発動する。

暗黒の魔力がその手から打ち出されエルザに向かう。

その数は多くはないものの、猛スピードでエルザを捕らえにかかると殺到。

それを素早い身のこなしで躱すエルザ。

決意の装束のお陰で身軽に動けてはいるが、一度捕まり攻撃を受けると致命傷は免れないことは明白だ。

暗黒の魔力を切り刻み、ジエラールに差し迫つたが、ここで魔力弾がエルザの腹に直撃。

塔の外へ弾き出されてしまう。

が、ここで落ちることはなく落ちゆく瓦礫を足場にジエラールへと剣を上段に構え振り下ろす。

「せっかく建てた塔を自分の手で壊していっては世話がないな！」

「柱の一本や二本などただの飾りに過ぎないさ」

「その飾りを造る為にショウたちは8年間もお前を信じ続けていたんだ！」

怒りの感情を露わにジエラールへの攻撃の手を一層激しくする。

ジエラールが躱し、部屋の内部の造りを壁にしてもそれごと斬る。8年間も騙され続け、その身を捧げ続けたショウたちの無念を想いジエラールを責め立てる。

「いちいち言葉の揚げ足をとるなよ。重要なのはRシステム。その為の8年間だった。そしてそれは完成したのだ!!」

暗黒の魔力はエルザを縛り上げる。

両手を塞がれ成す術なく生贊になるや、かに思えた。

「何!?

エルザの剣は、想いは。

暗黒の魔力を打ち破り。

その切つ先は遂にジエラールを捕らえた。

ジエラールの体の上に馬乗りになり、剣先を彼の首に狙いを定める。

勝敗は決した。

「お前の本当の目的は何だ?ツバキから聞いた。この塔はRシステムを作動するには魔力が全く足りない」

「……エーテリオン発射まであと3分か」

「答えろジエラール!お前の理想はもう終わっている!このまま死ぬのがお前の望みか!!」

ジエラールの体を己の足で、右手は自身の左腕で動かないよう力

を込める。

ツバキも見守ることはやめたのか、エルザの方へと歩み寄る。

実際もう魔力も体力も限界なのだろう。

エルザの疲弊しきつた体は彼には見破られていた。

「……俺はゼレフの亡靈にとり憑かれた。ゼレフの肉体を蘇らすための人形なんだよ」

「どり憑かれた?」

「(亡靈?……この禍々しい気配がゼレフの?本当に?)」

淡々と話し始めるジエラール。

エーテリオン発射まで残り2分。

「あの日、拷問部屋で俺は亡靈にとり憑かれたのさ。俺は俺を救えず、

仲間を救えず、仲間は俺を救えず……

「楽園など、自由などどこにもなかつた」

「全ては始まる前に終わつていたんだ」

悔恨の意を言葉の端々に乗せるジエラールの胸中から漏れ出した言葉。

エルザが思わず力を緩めるには十分なほど、その言葉は重かつた。

ツバキも警戒は緩めないものの、少し拍子抜けした顔だ。

「Rシステムなど完成するはずがないと分かっていた。でも体が、亡靈が止めることを許さなかつた」

「お前の勝ちだ、エルザ。もう俺を殺せ。その為に来たんだろう？」

エルザは先程までジエラールに対していた憎しみはもうそれほどない。

幼い頃、絶望しかなかつたあの塔の中で自分たちを導いてくれたヒーローのように。

今のジエラールはあの時と同じ瞳をしている、そうエルザは感じられた。

残り僅かな時間で二人はあまりにもすれ違ひ続けた時を埋めるかの如く、互いに言葉をかける。

「これは俺の弱さに負けた俺の罪だ。理想と現実のあまりの差に俺の心が追いかけていた」

「自分の足りないものを埋めてくれるのが仲間というものではないのか？」

エルテリオン発射まで残り30秒。

「私もお前を救えなかつた罪を償う。だから早くここから出るぞ」

「いや良い。俺は置いていけ。ここで天からの裁きを受ける」

「何を言つているんだ、早く！」

「頼むエルザ。今をもつてやつと俺は亡靈から解放された。最期くらいは『俺』の意思を尊重してくれないか？」

反論できないエルザ。

知つてしまつたのだ、彼もこの8年間苦しみ続けてきたということに。

自分たちを苦しめた黒魔術教団はもういない。  
いなくなつても尚自分たちを傷つけるこの世界。  
何が正解で何が間違いなのかが到底分からない。  
少なくともこの時エルザは、ジエラールの決断を止めることが正解だとは思えなかつた。

エーテリオン発射まで10秒。

「……ツバキ、頼む。もう時間がない、お前だけでも……」

「………」

「ツバキ？」

返事をしないツバキを訝しむエルザ。

彼は険しい表情を浮かベジエラールを睨み続けている。

きつと自分の命を粗末に扱つているが故の怒りかと思つたエルザ。  
自分だつて納得がいつていない。

ツバキがそう思うのは無理もないだろう、とエルザは考えたのだ。

「ツバキ、すまない。私にはジエラールをどうやつて止めればよいか  
……。奴を見捨てたいわけでは——」

「違うよ、エルザ」

エーテリオン発射まであと5秒前。

「こいつ、ここに至つてまだ——  
ツバキは少し後退し、片膝をつけ、左手を床につける。

「エーテリオン射出最終フェイズ完了」

「衛星魔法陣展開!!」

「祈りを」

「祈りを」

「祈りを……」

『聖なる光に祈りを!! エーテリオン解放!!!』

評議会により遂に発射されたエーテリオン。  
光の柱は楽園の塔へ。

エルザはツバキに脱出を急かすが。

「理想を諦めていない。 そうだろジエラール?」

「何を言つて……」

その光が塔を包み込むその瞬間のことであつた。  
ツバキがポツリと呟く。

「『保存』<sup>セーブ</sup>」

ドゴオオオオ、と地平線の彼方にまで重い轟音が響き渡る。

終わつた、と誰もが思つた。

エルザも。

船で塔から離れていたナツたちも。

エーテリオン射出し祈りを捧げた評議会の面々も。

2人を除いて誰もが終焉を覚悟した。

1人はジエラール。

エーテリオンの衝突により凄まじい量の煙がもくもくと立ち込め

るなか、彼は立ち上がり高らかに囁う。

「ククク……ハハハハハハ!! 遂に遂に遂に! このときが来た!!」

その声色は先程までとは打つて変わり、またもや樂園の塔の主としての様相である。

「ジエラール……？」

「驚いたかエルザ？すまなかつたなあ、また騙して。これが樂園の塔の真の姿だ！刮目せよ!!」

さつきまで弱音を吐き出していた姿も全部が偽物フェイクだつたということだ。

エルザに油断させエーテリオンを直撃させること自体がジエラールの目的。

それで27億イデアもの魔力が賄われるのだから。

シモンたちもエルザもそして評議会の者たちも騙し、Rシステムはここに完成した。

煙が晴れ、そしてその姿が明かされる。

「ん？」

「……は？」

2人は思わず呆けた声を出す。

無理もない。

何も。

何も変わっていないのだから。

エーテリオンが直撃した痕跡はどこにもない。

あるのは物々しい部屋の造り。

エルザとジエラールが戦うことできただ瓦礫くらい。

果たして夢だつたのかと思うくらい、何も変わっていなかつた。

言うまでもなくツバキの仕業である。

彼もまたジエラールと同じく終焉を覚悟していなかつた。

その必要がないからだ。

「ふう……何とか上手くいつたな」

「貴様ア、一体何をしたアア!!!」

今までで一番の激情を見せるジエラール。

その姿を見て怯むも、ツバキが何かをしたことに気づいたエルザ。

「ツバキ、一体何を……?」

「こいつの目はまだ諦めていなかつた」

ツバキはずつと引つかかっていた。

一体どこから膨大な魔力を調達するのかと。

それが明確でないまま8年も大掛かりな塔の建設をするはずがないのだ。

楽園の塔に着いてからこの塔の存在意義について考え続けていた。エルザが斑鳩と戦つているときに徹底的にこの塔を調べ尽くした。塔のどこにも魔力を貯蔵するタンクらしきものはない。

ゼレフ復活のための建物にしては、あまりにも非生産的で非効率的で非合理的な塔。

そしてジエラールがしきりにエーテリオン発射の時間を気にしているのに対し逃げようともしないその姿に違和感を感じ、一つの仮説を立てたのだ。

即ち、エーテリオンを利用する気ではないかと。

その仮説は見事的中した。

それを確信したツバキは塔全体に魔法を行使し、見事エーテリオンの猛攻を凌いだのだ。

「ちなみにこれが本当の正体だろ?『ムーブ』『移動』」

パチンと指を鳴らした後、塔の様相が一変した。

柱についていた豪華な装飾も、部屋の内装もない。

あるのは巨大な魔水晶の山。

ここにエーテリオンの魔力を貯蔵するつもりだつたのだろう。

魔力がないため、鈍い色で発光しているが。

「よくも、よくも俺の計画を……！死ぬ覚悟は当然できているんだよな？」

「お前こそどうなんだよジエラール。亡靈ごとに憑かれてエルザを何度も傷つけやがって……」

ツバキの口調は怒気に溢れていた。

己の理想のために心優しい彼女の弱みに付け込んだことに対してだ。

彼女がどんな思いで8年間を過ごしてきたのかツバキには推し量ることしかできない。

その苦しみを分かち合うことはできない。  
土壇場においてなお救おうとしたエルザのその気持ちを蔑ろにするのであれば、俺が許さんとばかりに。

「覚悟しろよ、ジエラール。俺は身内以外には手厳しいぞ？」  
「臨むところだ。俺の天体魔法の餌食にしてくれる……！」

優しき緋色の彼女を想う妖精の王と、狂氣なる理想に魅入られた天の星が今ぶつかろうとしていた。

地獄を見た。

終わりのない地獄を見た。

苦しみから逃れられない地獄を見た。

次々に地に倒れて伏していく仲間たち。

体から血を流し傷ついていく仲間たち。瞳から涙を流して死んでいく仲間たち。

彼ら一人一人が夢を持っていた。

実現したい心に志を掲げていた。

その為に生き抜くと決意していた。

皆が皆、それぞれの胸に想いを持つていた。

それらはすべて踏み躡られた。

狂氣に魅入られた黒魔術教団による蹂躪。

虐げら続ける自分たちを嗤い続ける悪党。

この地獄からいつ抜け出せるのかが分からぬ。

憎い。  
憎い。  
憎い。  
憎い。  
憎い。  
憎い。  
憎い。

全てが憎い。

子ども一人救えないこの世界が憎い。

姿も見えないものを神と崇め奉るクソ共が憎い。  
底なしの憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪。

「憎め」

拷問部屋で絶え間のない暴力に晒される自分。

痛みと恐怖の中で自分に囁く声が聞こえた。

憎しみこそが復活の鍵だとその見えない「声」は宣う。もつと憎めと。

さすれば奴らの崇める神に出会えると。

そしてその日からジエラールは憎悪の化身に魅入られた。仮初の自由などいらない。

この世界に自由などない。

本当の自由はゼレフのいる世界。

それを実現するために楽園の塔を建立する。

それこそが仮初の理想であると気づかずに。

「何があつたというのだ……」

一触即発の空気の中、そこへやつてきたのはジークレイン。

評議会にいたはずの彼が何故ここにいるのか。

その疑問をエルザはぶつける。

「ジークレイン! 何故お前がここにいる!」

「その質問は後だ、エルザ。妖精王、貴様一体何をした?」

エルザの質問には答えず、目線をツバキに向けるジークレイン。

彼の顔もジエラールと同じく険しい顔つきであった。

「簡単。俺の魔法でエーテリオンを防いだ。防いだというよりかは、塔全体をその場に留めたんだけど」

「バカな! ありえない! エーテリオンだぞ! 一体何をすればあの魔法から守れるというのだ!!」

「これ以上は黙秘させてもらうよ。あんまり人に言いたくないし」「ふざけやがつて……」

ツバキに問い合わせるも解決の糸口が見えるわけでもなく。飄々とした口調に怒りを滲ませるジークレイン。

ツバキは自分の魔法をあまり口外しない。

自分の手札を明かす必要はないと断じているからだ。

下手に対策を取られないようにする意味もあるが、その隠す姿が余計にジークレインとジエラールの怒りを加速させる。

当然だろう。

9人の評議員の祈りにより放たれた悪魔<sup>エーテリオン</sup>。

その魔法は周囲一帯を灰燼に帰す超魔法。

一度放たれたら、そこにいる生命は一切生存を許されない。

実際に27億イデアもの魔法を食らつて無事なものなどありはしない。

だと、いうのにこれは一体何だ？

何故塔は変わらずにいる？

何故ラクリマは魔法を吸収していない？

他にも、何故ラクリマの存在に気付いたのか、どうやつて塔の装飾を一瞬で剥ぎラクリマをさらけ出したのか、疑問は尽きることはない。

分かつてていることはただ一つ。

ツバキにより自身の計画は破綻したという事実のみ。

「クソ野郎が……」

「お前……、よくも俺の8年を……！」

「ジークレイン！ 何故ここにいる!? 今更ジエラールの蛮行を止めに来たわけではあるまい！」

エルザは再びジークレインに問う。

以前マカロフと共に始末書を提出しに評議会を訪れた際に遭遇したジエラールと瓜二つの顔の持ち主。

双子の兄と聞き、振りかぶった拳は収めたものの、ジエラールの行いを見て見ぬふりをしてきたロクデナシである。

その人物が評議会ではなく何故ここにいるのか。

そしてやはりお前たちは結託していたのだなど責め立てる。

「結託？それは違うぞエルザ」

「俺たちは元から一人だ」

「最初からな」

そう言いジークレインはジエラールへと溶け込む。エルザは驚きを隠せない。

そしてジエラールから溢れ出る魔力。

2人に分かれていたことで魔力が回復したのだ。

自らの計画のために評議会までも騙していた事実に絶句するエルザ。

一体どこまで欺いているのかと声を荒げる。

「お前は一体どれだけの人たちを騙し続けているんだ！」

「さて、魔力が漲ってきた。……覚悟は良いな、妖精王？」

その目は先程までエルザに向けていたものとは違う。

必ず殺すと、怒りと憎悪に塗れた色を浮かべている。

ここまで自らを虚偽にしてくれた相手は初めてだと。

そのあまりの変貌にエルザは怯むが、その肩を優しくツバキが抱く。

「ツバキ？」

「大丈夫だエルザ。俺に任せろ」

笑顔を見せ安心させようとするツバキ。

聖十大魔導の称号を持つジエラールだ。

いくらジョゼを倒したといつても、エルザはジエラールの狡猾さを改めて認識したところ。

不安な顔を拭い去ることはできない。

それでも大丈夫と言つてくれた彼を信じることを決めたエルザ。

ツバキはエルザに背を向けジエラールと向き合う。

「覚悟はできてるかつて？それはこちらの台詞だよ」

その声は静かに、されど力強く。

ここに至るまでに感じ取れた多く嘆きと悲しみの数々。

虐げられてきた者たちの無念。

それらを嘲笑うジエラール。

そしてエルザの涙。

ツバキが己の裡から噴き出す激情に身を任せたのに十分だった。周りの人間に距離を置く自分に対し怖がることなく近づく彼女。ズボラな生活を送る自分にため息を吐きつつ世話を焼く彼女。ときに嬉しそうに、ときに恥ずかしそうに笑顔を見せる彼女。そんなエルザの瞳から流れる涙を見て動かないほどツバキは人でなしではなかつた。

「ぶつ潰す」

「良からう、俺の天体魔法の塵にしてくれる」

ジエラールは魔法を行使する。

その魔法は先程までの禍々しいものではなく、煌びやかであつた。

「流星！」<sup>ミーティア</sup>

詠唱後、凄まじい速さで動くジエラール。

流星のスピードは秒速数キロから数十キロを超えるものまである。それと同じ速さで動くジエラールのスピードは、常人の視力では捉えられることは不可能だろう。

既にツバキの視界は流星が尾を引く光の残像で埋め尽くされてい る。

普通の魔導士であれば、反撃する間もなく一方的に攻撃を受け続けるのみ。

ジエラールは幾度もツバキへと突貫する。

直撃するその寸前で何とか回避するツバキ。

しかし尚も四方八方からジエラールは飛んでくる。

ツバキは手を向けようとするも、ジエラールは自由自在に空中を飛び回る。

涼しい顔をするジエラールに対しどこまでも無表情なツバキ。

焦っているのか何かを考えているのがが判別はつかない。いずれにせよ、今まではジエラールに対して有効打はない。

ジエラールはこの速さの世界でも次なる攻撃の手を打つ。  
その速さのままに空中に魔法陣を描いているのだ。

「もう終わる。お前に本当の破壊魔法を見せてやろう」

魔法陣はすぐに描き終わった。

一際大きく光る魔法陣が7つ、一繋ぎに歪な線となっている。

そこから漏れ出る魔力の大きさにエルサは青褪めるも、ツバキは変わらず無表情のまま突つ立っている。

その姿を見て反撃の手はなしと判断したジエラールはほくそ笑む。  
さらば妖精王、潔く死ねと。

「七つの星に裁かれよ、七星劍!!  
グラントシャリオ

「ツバキ!!」

隕石に相当する破壊力。

受ければ必滅。

大地は抉れ、体は五体満足ではいられない。

1人の人間に向けるにしてはオーバーキルが過ぎる魔法。  
さぞ愉快な死体を見せてくれるのだろうと、期待に胸を躍らせる  
ジエラールであつたが。

「……は？」

「あ」

その魔法は搔き消えた。

いつぞやのジョゼと同じくまるで存在しなかつたかのように、ジエラール渾身の破壊魔法は姿を消した。

そしてツバキにはその手があつたと思い出し、一人慌てていた自分を恥ずかしく感じるエルザ。

「またしてもか……！ 一体何の魔法だというのだ！」

【固定】  
ロック

ジエラールは理解しがたい現状に動きを止めてしまった。  
その瞬間を逃さずにツバキはジエラールに手を向け呟いた。  
そこから動こうにもピクリともしない己の体に驚きを隠せず焦りの表情を浮かべる。

流星の魔法は確かに発動する。

しかし体が硬直し、空中に張り付けられたまま動けない。

「クッソ、おのれえ!!」

「そら」

ツバキは向けていた手を下へと向ける。

ジエラールは猛スピードで地面へと落下した。

勢いよく激突し、チカチカと目が点滅する。

「力ハツ……」

瞬きの間に状況が逆転した。

そこから動けないように見えた。

「星雲龍!!」  
〔ネビュラブレイク〕

ジエラールは倒れ伏しながらも攻撃の手は休めない。

落下中にも次なる魔法の準備を進めていた。

合わせた両手の内から発生した靄の如き塊から、龍を模した星雲の

レーザーが9つほどツバキに向け逆る。

グランシリオよりも攻撃の規模は小さいが、速さが段違いだ。  
次々にツバキへと殺到する。

それらは悉く搔き消えた。

後ろから回ったレーザーも、ツバキは振り返って搔き消す。

「…………ん？」

ここでジエラールが疑問の意を孕んだ声を上げる。  
「今度はこっちから行くぞ」

ツバキはそう言い手両腕を左右に広げ、掌を広げる。

次の瞬間、ジエラールの流星により碎け散っていた当たりのラクリ

マが浮かび始めた。

そのラクリマの性質が変化する。

炎水氷土光鋼風といった様々な魔力に姿を変え、それらが一斉にジエラールへと牙を剥く。

『上書き保存』、そして『<sup>ムーブ</sup>移動』

自分の属性でもない魔法をいとも簡単に操作するツバキ。

高難度の魔法を一息の間に完成するその謎の魔法理論。

それらを回避しながらジエラールは思考を止める事はない。

「（塔の固定、装飾の一掃、そしてなぜか消える俺の魔法。他にも空中に固定やラクリマの材質変化と来たか……）」

果たしてジエラールはツバキの魔法に対しても一つの結論を下した。

「……成程な。これが正解かは分らんが、いずれにせよ貴様の魔法の一端は理解できたぞ」

「……」

何も答えないツバキにと対してエルザは興味を惹かれた。

彼女もツバキが行使する魔法について幾度も考察したことがある。ツバキに聞いてもなぜか答えてくれないので。

聞くたびにツバキはこう答えていた。

曰く、これは『ハッピーエンドを作り上げるための魔法』だと。

彼はそれを目指しているのだという。

この魔法はそれを実現するために必要なものだと。

分けも分からずその後もぐらかされるばかりであつたのだ。

「貴様のその空間操作が如き魔法、視認した物体を思うが儘にする魔法だろう」

「……」

ツバキは何も答えない。

「恐らく視認することがお前の魔法の発動条件だ。だから俺が流星を

使っている間は俺に魔法を使えない。逆に放たれた魔法は原理は分らんが、視認して焼き消しているということ」

この僅かな時間でジェラールはそこまで見抜いた。

驚きの表情を隠せないエルザと無表情なままのツバキ。

ジェラールの考察結果はまだ続く。

「そしてわざわざ後ろに振り返つて俺の魔法を見てから焼き消したのもこの条件が理由なら納得がいく。エルザが斑鳩と戦つているときに姿を消したのは、エーテリオンからこの塔を守るためにこの塔全体を観察していたということか」

「そんな魔法が……」

エルザは開いた口が塞がらない。

ジェラールから聞いたツバキの魔法は到底信じられないものだった。

だがこんなチートみたいな魔法を行使されれば、聖十大魔導士が手も足も出ないので納得がいく。

塔の装飾の一掃やラクリマの材質変化も視認したからこそできたこと。

魔法も見てしまえばツバキに届くことはないのだということ。  
……強すぎないか？と目が点になるエルザであった。

ふとため息をつくツバキ。  
そしてジェラールへ向ける目の色を変えた。  
「これだけの大魔法。リスクがあつて然るべきだが、そこまではわからぬ。だがどうだ妖精王？俺の仮説は当たつているかな？」

「……ハア」

そしてジェラールへ向ける目の色を変えた。

「お見事だジェラール。俺の魔法を初見でここまで理解した奴はお前が初めてだ」

「そうか、それは光榮だな」

「だが、半分正解で半分間違いだ。これ以上は言つつもりはない」

何、といったジェラールだがすぐに口を閉じる。

彼自身も「仮説」と述べていた。

これが満点回答という自信は端からなかつたのだろう。

しかしこれで攻略法が見えた。

要は流星を行使し続ければ良いだけのこと。

多少魔力は浪費するが、それでも「いつは何もできないということ」が分かつた。

「まあ良い。次で終わらせる。流星!!」

再び超スピードで空を駆ける。

既にツバキの視認可能速度を超えていたためツバキは何もできな  
い。

「キヤツッ！」

「!? エルザ!!」

ジェラールはその速さのままにエルザを捕らえ、またも空中を飛び  
回る。

魔力を使い続け疲弊していたエルザは抵抗する間もなく、秒速数十  
キロの世界に投げ出された。

ジェラールは平氣だが、疲弊した体でこの速さの世界に急に投げ出  
されたエルザを襲う強烈なG。

脳内や体内をかき回されるようなその感覚に吐き気を催す。

あと数秒もあればエルザの体も壊れてしまうだろう。

「ハハハ、何も直接お前を倒す必要はない！こうして人質をとるなど  
やり方はいくらでもあるのだからなあ！！」

「うぐあつ！」

悲鳴を上げるエルザの声が四方八方から木霊する。

その声に宿る悲痛さに険しい顔をして怒りを滲ませるツバキ。

「そうか、それが貴様のやり方か……」

「どうした妖精王！手も出せない、仮に何らかの魔法を使つたとして  
もそれはエルザに直撃するだけだ！！」

姑息な手段をとるジェラールはまたもや逆転した形勢に酔いしれ  
る。

ハツキリ言つて魔法ではツバキの方が格上であることは間違ない。

しかしそんな彼を歯噛みさせるような状況を作り出したことに愉悦を感じていた。

エルザは涙を零す。

それは痛みからではない。

彼の足枷になつてているという事実に対してだつた。  
一体自分は何をしているのだ。

彼に自らの仇をとつてもらつて いるだけでなく、その邪魔をしてい  
るではないか。

こんな苦しい思いをするならいつそ、と。

エルザはツバキに希う。

「頼むツバキ！私のことは気にするな！私<sup>ご</sup>と攻撃しろ！」

「正気かエルザ？この状態で衝撃を食らつたら間違なく死ぬぞ？」

まあ最早俺はそれでもかまわんiga

あれほどまでにエルザを生贊に捧げるつもりだつたのに。

今ではもう要らないものとして数え、処分しようとしている。

ジエラールのその思考に。

エルザの自己犠牲精神に。

遂にツバキは限界を迎えた。

「エルザ、君は後でお説教です」

すうつと息を吸うツバキ。

カツと目を見開いた。

「<sup>マクシマイズ</sup>最大化」

そう声に出したその時であつた。

「何だこれは!?」

「ふえ…？」

ジエラールとエルザが巨大化した。

エルザは理解の範疇を超え、すんごく可愛い声を上げる。  
その声に悶えそうになるも、次なる一手をツバキは出す。

『スイッチ切替』

今度はエルザとツバキの位置を入れ替わった。

ツバキは怒りの形相でジエラールにつかみかかる。

ツバキはジエラールを視認できたわけではない。  
彼が飛び回るその空間ごと巨大化させたのだ。

空中ごと巨大化した弊害により、彼らの周りは歪んだ空間が広がっている。

ジエラールたちが巨大化したことによりツバキはその姿を捉えることが可能となつたのだ。  
体が大きくなり、動きが相対的に鈍くなつたところへ次なる魔法を行使したというわけだ。

「お前がいるからエルザは涙を流す」

「離せ、クソ野郎が!!!」

ジエラールは振り落とそうと抵抗を試みるも、ツバキは関節を器用に決めることでその動きを封じる。  
そして右手を掲げた。

「お前みたいなやつには何を言つたって無駄だ。話を聞き入れるスペースがない。」

狂気に魅入られた者には話が通じないことをツバキは知つていて。自分が信じる世界や思想が正しいと疑つていながらだ。

そこに他人の考え方や価値観、主張が入り込む隙などありはしないのだ。

大きく振りかぶった右手の拳をジエラールの腹へと突き刺す。  
ドゴン！

その衝撃は辺りにまで響いた。

その拳の重さは隕石の如く。

されど打点はツバキの拳の大きさ。

一点集中でつぎ込まれたその圧力はいかなるものか。

「ゞぶほつ……」

ジエラールは喀血しながら勢いよく落下する。

あまりに重いその拳を無抵抗で受けたその体は全身を引き裂かれるような痛みに襲われる。

体中が痙攣している。

立ち上がるうとする腕に力が入らない。

こいつは何なんだと混乱する頭の中でも、考えるのは理想の世界のこと。

こちらに歩み寄るツバキの気配を察したジエラールは、執念のみで体を起き上がらせる。

「痛みと苦しみの中でゼレフは俺に囁いた

両腕をツバキに向ける。

その腕は震えていた。

「真の自由が欲しいかと呟いた」

魔法陣を描き始める。

その魔法は煉獄碎破。アビスブレイク

目の前に立つ憎きツバキを殺すために塔をも消滅させる魔法を行使しようとしている。

「俺は選ばれし者。俺がゼレフと共に真の自由国家を創るのだ……」

「人の命や自由を奪つてまで創るものもあるまい」

「黙れ、地獄を見たことがないお前に何が分かる……！」

荒い息を吐きながらもその魔法を発動した。

当然ツバキによつて搔き消される。

「亡靈に縛られているお前に何を創れる」

ツバキがジエラールに向ける感情は最早怒りではなく憐れみであつた。

ここまで彼が狂つてしまつたその背景に、ツバキは気づいていた。彼の体から迸る禍々しい気配に、懐かしい人の姿を見たのだ。

「（ウルティア。一体何が目的だ。君は意味もなくこんなことをする奴じやないだろう）」

彼も被害者なのだろう。

エルザと同じく奴隸としてここに連れてこられ、苦しい日々を過ごした。

そんな中で狂気に堕ちても仕方がないかも知れない。

それでも彼がした行いは到底許されることではない。

彼は多くの者を虐げた。

彼は多くの者を欺いた。

彼はエルザを泣かせた。

許すつもりはなかつた。

だがそれでは救えない。

ハッピーエンドを目指すためには、彼も救わねばならない。

彼は根っからの悪人ではないのだから。

だからこそツバキはこの一撃を以て、

ジエラールが狂い苦しんだこの8年間に、

エルザが涙を流し苦しんだこの8年間に、

終止符を打つ。

「自分を解放しろジエラール。『初期化』<sup>リセット</sup>」

広げた掌をジエラールの体の中心に宛がう。彼を柔らかな光が包み込み、そして収まる。その光は攻撃魔法ではない。

あらゆるものを浄化し、  
あらゆるものと戻し、  
あらゆるものと解放する。

この8年間で一番苦しんだであろうジエラールが少しでも救われる  
ように。  
ツバキのその一手はこの楽園の塔で行われた戦いの中で、最も優し  
かつた。

## 幕間の物語Ⅰ

「何泣いてんだ？」

「……お前は」

幼少期の記憶、成程これは夢かとエルザは理解した。

ジエラールとの戦いが終わり、気を失つて自分はホテルで休んでいたのだつたか。

長年の呪縛もツバキによつて解かれたためか、懐かしいものを思い出していた。

思い出すは初めて彼と話したときのこと。

ロブおじいちゃんから教えられた場所にたどり着き、彼の知り合いだというマスターのもとに置かせてもらえるようになつたとき。

奴隸だつたみんなと一緒に自由のために立ち上がるも、ロブおじいちゃんを亡くし、ジエラールに傷つけられ。

トラウマを思い出し、一人泣いていた私に声をかけてくれたのがツバキだつた。

お前には関係ない、と言おうとした次の瞬間のことであつた。

「そつか、見ていて鬱陶しいから早く泣き止めよな」

絶句した。

最低すぎるその台詞に思考が停止した。

なんてことないよう、鼻をポリ。ポリ搔きながら言うその姿に。

聞き間違いかと思つたが、しかしそうではないことは目の前のこのぽけつとした顔を見れば分かる。

これまで優しく接しようとしてギルドの人たちを冷たく突っぱねていたのは私だつたが。

しかし、まさか泣いている女子にこうも辛辣な言葉をかけてくる男がいるとは思わなかつた。

ちなみに後でわかつたことなのだ。

これは「女子が泣いている姿は見ていて気持ちの良いものではない」と伝えたかったらしい。

彼の変な方向へのコミュ障ぶりに頭を悩ませるのは割といつものことなのだが、この時はそんな事分かるわけもなく。

「何だとお前っ!!」

「えあれ何でそんなに怒つて…、あ、ちょ待つ」

思わず炎帝の鎧で殴つてしまつたのも仕方ないことだろう。

……いや思い出しても本当に酷いな、コレは。

そこからツバキと奇妙な縁ができ、私は次第に妖精の尻尾に溶け込んでいた。

明らかに過去に何かあつた様子の私の様子にみんなどう接したら良いか分からなかつたのだろう。

ボロボロの衣服に失明した片目でギルドにやつてきてまだ間もない頃だ。

気を遣うなという方が無理だ。

ジエラールに裏切られ親しい人たちとの別れを経験していた私は、当時誰とも馴れ合うつもりなどなかつた。

グレイやカナが話しかけてくれても一切関わろうとしなかつた。

周囲も私を「そう扱う」ことに慣れてきていた。

「なあなあエルザ、知つてゐるか? 猫の体つて本当に液状化するらし

いぞ？」

この男には全く通用しなかつた。

毎度毎度途轍もなくしようもない話題で私にかまつてきた。

私がどれだけ「近づくなオーラ」を発しても無視し私に話しかけてくる。

初めは「うるさい」「関わるな」と言葉を荒げて距離を置こうとしていた。

暫く経つと何を話しかけられても無視するようになつた。

それでもあいつは私に話しかけていた。

初めての頃に言われた「鬱陶しい」が離れないのだ。

このころは「お前の方が鬱陶しいではないか」と常々思つていた。口を開くと更に面倒なのは理解できたので一切聞こうとしなかつた。

どれだけ冷たく突き放しても。

どれだけ厳しく睨んでも。

彼は私にかかるなどを諦めなかつた。

それが何百回と続いたある日。

私はふと気まぐれに問うた。

「……なあ」

「ん？・どした？」

彼は恐らくほぼ初めての私の返答だというのに驚いた様子もなく答えた。

「どうして私にかまうんだ？」

ちょっととした意地悪も兼ねていた。

こいつはどんな返答をするのだろうか。

もし「放つておけない」とか「同じギルドのメンバーだし」

など、他の奴も言つてきたつまらない言葉を言おうものなら金輪際

口はきかないつもりだつた。  
さあ、なんて答える？

「そりやー、好きだからだよ」

…………は？

「え何、俺が毎日意味もなく話していたと思つた？なわけないじやん、  
俺どんなドMよ」

いやいやちょっと待つて…………。え？

「初めは綺麗な髪の色した女の子だなと思つてたんだけどな？話して  
みたら聞く素振りもないから、こりやー意地でも返答貰うまで話しか  
け続けてやろうつて思つてな？」

待て本当に待て整理が追い付かない。告白されたのか私はもしや。  
「毎日続けていると何かハマつちまつてな？でも意外と話聞いている  
んだなエルザって。甘いものの話や服の話すると耳がピクピク動い  
ているし、眉毛もちょくちょく反応するし、あれ意外と俺の話届いて  
いるんだなつて思つてからは毎日『今日はどんな話題しようかな』つ  
て思つて……」

「もういい黙れ貴様ーー!!」

「ぶほえつ」

思わず煉獄の鎧で殴つてしまつたのは仕方ないことだろう。

それぐらいの衝撃だつた。

誰が告白されることを予想できようか。

しかも堂々とギルドの中で話すとは。

お陰で私の今までの冷たいイメージは綺麗に剥がれ落ちたみたい

で、それからひつきりなしにメンバーと交流を持つことになった。

「ツバキに告白されたの？」

「彼のどんなどこが良いの？」

「返事はどうするの？」

と鬱陶しいことこの上なかつたが、既に手遅れだつた。

やがて、私はあいつの滅茶苦茶な言動に振り回されるようになり、その度に鎧で殴ることが日常となつた。

こうなつてからはもう自棄だ、と日についたギルド内の風紀を注意していたらいつの間にか風紀委員のようなポジションになつていた。

そして私はこのギルドにいることに居心地の良さを覚えるようになつていつた。

こう思うようになったのもツバキのお陰と言えるだろう。

あいつはアプローチを変えるためかそれから一切無駄話をしに来なくなつたが。

今となつては最早私に告白したの忘れているのではないか？

……あり得るな。

あれからギルドの一員として過ごしていくに連れツバキに惹かれ始めている自分に気づき、そこからは私からも何度かあいつに話しかけるようになつた。

……我ながらチヨロいな。

呆れて出る言葉がない。

しかし、私の心の鎧を解き放ってくれたのはあいつだつた。

今回の一件でもあいつは私のことを守つてくれていた。

もう認めよう。

隠し続けるのは無理だ。

私は、ツバキが好きだ。

☆☆☆

その後のことである。

簡潔にまとめると以下の通り。

- ・戦闘が終了するも楽園の塔は完全に崩壊。
- ・崩落する瓦礫の中でツバキはエルザと脱出。
- ・生還後、シモンたちとの別れ。

ジエラールだが崩落していく瓦礫のなかで何とか見つけ出した俺は彼の体をはるか彼方へ飛ばした。

方向としては評議会がある。

少々手荒な送還となってしまったが、腕の中にいるエルザが気を失つたため早く離脱する為の致し方ない措置だつた。

瓦礫の材質を柔らかいものへと変化し、周辺海域に出来る限りの配慮をしたうえで脱出した。

そしてホテルにてエルザが目を覚ました後、シモンたちとの別れのときが来た。  
初めは勘違いから一方的に襲つてしまつたとはいえ、本来は味方同士。

妖精の尻尾の様式に倣い、盛大な花火を打ち上げて送別会は終わつた。

互いに禍根を残すことなく彼らは旅立つていった。

この一件の後、俺の頭の中は一つの疑問に頭を悩ませていた。  
ウルティアのことである。

昔なじみの気配をジエラールの怨念から感じ取り疑問に感じていた。

事件後エルザからいろいろ話を聞く限り、どうもジークレイン（ジエラールの思念体だつたが）の側近にウルティアと思しき女性がいるらしいが、それだけだ。

「（仮にも側近ならなぜあのような憎悪を植え付けた？）」

何度も考えた疑問だが答えは出ない。

ジエラールを憎悪に追いやることが目的ではなく、あくまで何かの目的のための「手段」なのか。

まさか本当にゼレフを蘇らせるために？いやしかし…、と考えるも。

「（まいつか。わかんねーし、なんか事情があるのかもしんねーし）」

いろいろ考えてみて分からんもんはとりあえず放置だ放置。

意味もなく凶行に出る輩ではないと知っているし。

また、思い出して悩んで放置するのループに入るのだろうが。

「（今度会うことあつたら一言文句言つてやるか。さて、問題はこつちの女王様だな）」

目をやるとそこには強張った表情で正座するも、何故このような事態になつているか全く分かつていない様子のエルザがいた。

ちなみに場所はホテルの一室である。

「えーと、ツバキ。何故私は正座をさせられているんだ？」

「ん、分からない？」

「ひうつ！？」

普段あんまし笑うことのない俺の顔にエルザは身を竦める。

冷や汗をかくエルザに思わずため息を吐く。

「あのねえ、エルザ。君は些か自己犠牲の精神が強すぎるよ。今回一体何度一人で問題を背負いこもうとしたか、まさか分からぬわけないよね？」

「う…それは…。だつて私の問題でもあつたし……」

「いやもう完全に妖精の尻尾の問題だから。ナツたちがシモン君たちに襲われた時点でそだから。ていうかエルザの問題なら俺たちの

問題でもあるから」

「そうなのだが……いやそうだな。すまない」

妖精の尻尾の一員である以上、メンバー一人一人が家族と同義であるとはマスターの教えの通り。

皆が心の中に傷を抱えていても互いが思いやるからこそ、同じ時を楽しく過ごせる。

家族が困つていたら手を貸すのは当たり前のこと。

プライドが高いのか、皆を巻き込みたくなかったのか（おそらく後者だが）。

優しいからこそそう判断したのは分からぬでもないが、ちょっと力チンときたので説教していた。

「分かってくれたのならもう良いけど。とにかくこれからはみなを頼ること。難しいなら俺だけでも良いから」

「え、良いのか？」

「おう、じゃんじゃん頼りなさい」

正座していたエルザに手をやり立ち上がらせる。

「…………ありがとう」

「どういたしまして」

（ぬお、エルザの手柔らかっ）

相も変わらず煩悩まみれのツバキである。

☆☆☆

そして帰ってきた妖精の尻尾。

僅か数日離れていただけなのが、ずいぶん久しぶりに感じる。

マグノリアの街に着き、ギルドの方向へ歩きやがて到着すると驚きの光景が待ち受けていた。

「スッゲー!!」

「完成したのか」

幽鬼の支配者との抗争で壊れてしまつた私たちのギルドが新しく建て直されていた。

中にはオープンカフェにグッズショップ、プールに遊技場が出来上がっていた。

……何だこれは、私が。

私はこんな甲冑は着ないぞ、それに肌もここまで硬くない。

ウエイトレスの服も新調されている。

ほう、中々可愛いな今度着てみよう。

ツバキに見せたら喜ぶだろうか。

「（……ツバキはどういう反応をするだろうか）」

ツバキの方を見やると表情はいつもの如くあまり見えないが、目線はウエイトレスたちの方へ向いていた。

あいつめ……。

今回の事件で一つ分かつことは意外とあいつはいやらしいことだ。

水着でいたら結構視線を感じた。

下卑た感じではなかつたし、寧ろあいつに見られて嬉しくないわけでは……、いやよそう。

ツバキの耳を引っ張り、椅子に腰かける。

「痛い痛いっ。どしたのさエルザさん？」

「ポーカーフェイスで隠しているつもりか？釘付けだぞ」

「ええ……、鋭すぎでしょこの子。仕方ないじゃん刺激的な格好してたら思わず見てしまうのが男の性だよ？」

「む」

「え、ちょっと待つて痛い痛い強くしないで」

コイツが他の女を観てているのは腹が立つ。

もうどうしようもないくらいに惹かれているので今更否定する気はないが。

「帰ってきたかバカタレドも」

「マスター」

その後マスターの紹介で新たに元幽鬼の支配者のジュビアとガジルが妖精の尻尾に加入することになつたと伝えられた。

ジュビアはともかくとしてガジルか。

我々のギルドを壊した張本人だからか皆が殺氣立っている。

警戒が必要だな。

「マスターの判断なら従いますが、しばらく監視していた方が良いで

しょう」

「はい」

マスターは微妙そうな顔をしながらも一応は納得してくれたみたいだ。

その後始まつたいつも通りの乱闘騒ぎに懐かしさを感じつつ、私はケーキを落とされた恨みを晴らしに行つた。

「私のケーキイイイ!!」

「あーほらほら。俺の分けてあげるから。…聞こえてないか」